（2024 年 1 月 21 日）

第 10 回赤松小三郎講演会のご報告

今回で第 10 回を迎える赤松小三郎講演会は、日比谷図書文化館（千代田区）で 103 名が参加のもと、講師に町田明広氏（神田外語大学教授）をお迎えして開催された。講演会終了後には、赤松小三郎研究会設立 10 周年を記念して、赤松小三郎エッセイ賞の授賞式が行われた。

日　時　　：2023 年 11 月 26 日（日）14:00～16:40
場　所　　：日比谷図書文化館地下 1 階コンベンションホール
参加者　　：103 名（上田高校同窓生 24 名、一般 79 名）
◎演題　　：『幕末政治と赤松小三郎』
◎講師　　：町田明広氏（神田外語大学教授）

＜配布資料＞(※)印の資料は本報告に添付していますのでご参照ください。

① 町田明広講師講演資料(※)
② 赤松小三郎略年譜(※)
③ 「赤松小三郎研究会」入会のご案内(※)
④ 「赤松小三郎研究会」最近の活動概要(※)
⑤ 「赤松小三郎講演会」アンケート
⑥ 第１０回赤松小三郎講演会案内チラシ(※)
⑦ 町田明広講師著書案内チラシ
⑧ （関良基氏新刊書案内チラシ）
⑨ 「赤松小三郎エッセイ賞」受賞作品一覧

＜冒頭＞

〇赤松小三郎研究会 会長 滝澤進より挨拶
〇同研究会 事務局長 小山平六より講師　町田明広氏の紹介
〇同研究会 事務局 西澤澄雄が司会

＜講演要旨＞

１．　人物研究のポイントとは

①歴史の叙述とは、執筆者による「解釈」に基づいたもの

- 歴史を書く、あるいは歴史を語るときに、その書き手もしくは歴史家の解釈の違いが生じる原因：解釈をする際に着目する資料とか先行研究の違い（例：薩長同盟は軍事同盟か否か、軍事同盟ならどう重み付けをして説明するかが大事）。
- 解釈の違いで、（歴史的事象に）ある人物が出てきたり、出てこなかったりすることが生じる理由：どの史料を見ているかによる（例：「坂本龍馬が薩長同盟の裏で動いた」という史料は通常は一点のみ）。
- 通常参照される以外の史料のどこに研究者が着目するか、自分が研究する段階までに、どのような研究が行われたのかが重要なポイント→その周辺事情を博捜（史料・文献などを広範囲にわたって探し求めること）する必要あり。
- たとえば、薩長同盟について解釈する場合、長州、会津、薩摩各藩の史料を見る、当時の中央政局の状況はどうなっていたかなども調べる。ピンポイントではなく、もっと広い視野でその問題を捉える（あるいは捉えない）いう方法で踏み込んで行く。
- 通説の根拠とされてきた周辺にこそ、重要な手掛かりがあるかもしれないと考える。

②人物の叙述においても、執筆者それぞれの研究成果から導き出された「解釈」を基に叙述

- ①での方法は、歴史上の人物を叙述、研究する際にも当てはまる。研究者あるいは執筆者なりの解釈によってその人物像が作られる。
- 歴史上の人物のうち「その人」を選んだ段階で、研究者の興味、関心が「その人」にあり、イメージがプラスということも選ぶ際に意識されがち→バイアス（自分の「思い」）が出てしまうことがある。よって、人物を描く＝その人物を描くことによって歴史を描くこと。その人物に対する好き嫌いや先入観はなるべく遠ざけて、客観視することが必要。
- その人物が好きだということで取り上げると、その人物の顕彰に陥ってしまう。これを避けてマイナス部分にも目配りする必要が当然あり、人物を描くときにはプラス、マイナスの両面を描かなければいけない。

③分析視角として、思想や行動をその人物の個性のみに求めるのではなく、それらを規定した同時代の秩序・観念や政治・経済・社会・文化といったすべての生活領域に及ぶ規範から、人物を丁寧に説き起こすことを意識

- 自分の人物研究では、分析視角を重視するポイントとしている。その人物の思想や行動を、その人物の個性のみに求めるべきではないという考え方に立脚して研究。
- その人物が生きていた時代と、それを規定したその時の時代の背景に注目。

- 例：幕末期－幕末期の秩序、観念、政治、経済、社会、文化など、その人物の生活領域に及ぶようなさまざまな規範などから、人物を丁寧に説き起こすことを意識。

④伝説化された人物には、政治史と人物像の乖離を正しく認識し、人物把握と政治史との照合を丹念に行い、政治史における人物評価をやり直すことによって、歪んでしまった政治史に矯正を施す必要

- 具体的な研究手法、方法については、以下のようにふた通りあると考えており、自分は人物を取り上げる時の基本的な考え方としている
  〇伝説化された側面が強い人物：主として一次史料に基づいて虚構を排除
  〇歴史に埋もれた無名に近い人物：史料の中からその人物を再発見して実像を体系的に明らかに描き出す
- 伝説化された側面が強い人物（例：坂本龍馬、高杉晋作）については、政治史などと乖離した人物像が描かれがち。そこで、その人物をきちんともう一度把握し直すと同時に政治史と丹念に照合し直したうえで、その政治史における人物像の評価をやり直す。この方法は、自分の書いた本『新説　坂本龍馬』の執筆で行っている。
- 歪んでしまった政治史に矯正を施すことが、誰でも知っている人物を取り上げる場合の、研究者としての本来のスタイル、スタンスと考える
- 歴史に埋もれていた人物については、政治史における人物発見を行わなければいけない（例：岩瀬忠震など）。次に、人物研究を実証研究のレベルに引き上げて行く。さらに、その実証研究で人物視角の重要性を十分に意識して、その人物研究から見える新たなことを発見して行く。次いで、彼を研究することによって新たな政治史を構築する
- **赤松小三郎という人物は、歴史に埋もれた人物の典型的な例。**よって、上述の方法に則り、赤松小三郎を発見→赤松研究を実証的な研究レベルに引き上げ→人物的視角を十分に意識しながら研究を実施→政治史の中に新たに赤松研究を取り込むことで政治史を構築し直す、ことが必要と考える

⑤こうした分析視角・研究手法を用いて、人物研究を行うことによって、政治過程そのものの検討を深化させることができると確信

- 人物研究をすることで、研究の相互作用を経て政治史の研究も深まると考える。

２．　赤松小三郎の一般的理解

①幕末維新期の重要人物にもかかわらず、ほぼ知られていない実態。極端に過小評価された人物

- 赤松小三郎は幕末維新期の重要人物であるが、ほぼ知られておらず、極端に過小評価されている人物。

- 「朝日日本歴史人物辞典」人となりが紹介されており、*磊落不羈（らいらくふき）にして経綸（けいりん）の才があった*という評価があるが何をもって、こういう人となりなのかということが分からない。

②“知られざる偉人”となった背景として、慶応３年と言う早い時期に暗殺されたこと、犯人が薩摩藩士であったことなどから、歴史に埋没し、その功績は坂本龍馬等に横取りされたため

- 赤松が知られざる偉人となった背景は次の二点：①慶応３年という早い時期に暗殺されていること（明治を見ずして亡くなったこと）、②暗殺の犯人が薩摩藩士であったこと。
- この結果、歴史に赤松が埋没してしまい、その功績を坂本龍馬に（後世の人いわく）横取りされたような状況になっているのではないかと思われる。

③本講演の目的は、赤松小三郎の人物像を先行研究に留意しながら再度点検し、その事績を検証しながら、幕末政治史の中で再度位置づけること。その際、「建白七策」から政治（変革）家との側面が強調されるが、軍事戦略家の側面を再確認すること

- **本講演の目的：赤松小三郎の人物像を、先行研究に留意しながら再度点検し、その事績（今日的な意味では業績）を検証しながら、幕末政治史の中で再度位置づけたいということ**
- **その際に、「建白七策」（慶応３年に赤松が将来の国家構想を建白したもの）を建白した政治変革家との評価については、触れることはあるが、むしろ赤松の軍事戦略家としての側面を再確認したい**
- そもそも、軍事戦略家としての評価が始まりで、その後、政治変革家としての評価が高まったのかもしれない。しかし、軍事という面でももう一回きちんと評価しておいた方が良いと考えている

３．　赤松小三郎の生い立ち

①天保２年（1831）４月４日、上田藩士芦田勘兵衛（家禄 10 石３人扶持、藩校明倫堂の句読師）の次男として城下・木町で生まれ、幼名は清次郎、兄は柔太郎

- 天保２年（1831 年）に、上田藩士の芦田勘兵衛のもとで、次男として上田城下に生まれる。
- 上田藩に生まれた生い立ちが今回の講演のキーセンテンスとなる→**老中を出す譜代小藩上田藩で、赤貧の下級藩士に生まれた事実は、その後の赤松小三郎を規定する最重要要素。**
- 上田藩に生まれており、上田藩の中でも非常に貧しい下級藩士として生まれたことが、赤松の生涯を貫く一つの大きなものだったと考えられる。

②藩校に通いながら、叔父の藩士植村重遠から和算（数学）を兄とともに修学

- その後、藩校に通いながら、叔父の植村重遠という藩士から数学を兄と共に学ぶ。。
- 嘉永元年に、藩士の森田斐雄と一緒に江戸遊学を開始。幕臣で和算の大家である内田弥太郎の塾、瑪得瑪第加(マテマチカ)塾で、測量・天文・暦学・地理・蘭学を幅広く５年間ほど学ぶ。
- 赤松は、ほぼ間違いなく漢籍も習得しているはずで、今で言う文系、理系両方半端じゃなくできる人、ある意味、万能の天才に近いところがあったと思われる。
- 嘉永 5 年に、内田の紹介で、幕臣で高島流砲術家の下曽根のもとで蘭学、砲術を修得する。この下曾根との出会いというのも一つの転機で、兵学を志す赤松の起点になったといえる。
- 長期間の江戸での修学は、赤松がいかに優秀であったかとの証左であり、同時に、**藩の期待もかなり大きかった**と思われる。

③安政元年（1854 年)、一旦帰藩し赤松家（10 石 3 人扶持、下級藩士）の養子。数学助教兼操練世話役に登用。

- 安政元年、一旦、上田藩に帰り赤松家の養子になる。そして、江戸遊学の評価を受けて数学助教に登用。
- この赤松家も、赤松の元々の芦田家と同様、非常に下級の赤貧の家であった。
- 家督相続前の数学助教兼操練世話役への登用は、この段階での上田藩による赤松への非常に大きな期待があったことをうかがわせる。

４．　勝塾入門と長崎海軍伝習所

①安政元年、更なる兵法修学のため、再度出府。上田藩士山田貫兵衛（西洋流砲術世話役）の長男純一郎が海舟門下生であり、その仲介で勝海舟の兵学・蘭学塾に入門

- 安政元年に、さらなる兵法修学のために再度、江戸に出府。上田藩はまた出府を許している。
- 上田藩士の山田貫兵衛の長男、純一郎が海舟門下生だったことで、その仲介で海舟の兵学・蘭学塾に入門。
- 安政二年に、長崎海軍伝習所の一期生になる勝海舟に上田藩から依頼をし、赤松は勝の従者として幕府の軍艦昌平丸で、海路長崎入りをする。
- 赤松は、この海軍伝習所で正規の生徒ではないが、授業を受けることができた。
- この長崎でのいろいろな出会いというのが非常に大きかったと私は考えている。勝海舟はもちろん、岩瀬忠震、永井尚志、木村喜毅などと長崎で接触している可能性が高い。彼らとの人脈もできたし、学んだことも大きかったと考えている。

②勝の内侍として員外聴講生の資格で語学、航海、造船、数学、測量、砲術等を学修。長崎遊学のため上田藩から組付御徒士（2 人扶持支給）拝命

- 海軍伝習所では、勝の内侍として、院外聴講生の資格で語学、航海、造船、数学、測量、砲術等を学修。上田藩からはこの時に 2 人扶持を支給される。
- **上田藩が赤松の長崎行きを許した背景として、老中松平忠固の存在というのを意識せざるを得ない**と思われる。推測の域を出ないが、藩主に松平忠固という、老中をやるような非常に開明的な藩主がいたことが、赤松の派遣につながったのではと考えている。

③安政 4 年（1857）3 月、海軍ではなく、陸軍を選択したため、勝の許を辞して小笠原鐘次郎（書院番戸川伊豆守組）の従者に転身

- ただし、上田藩が赤松に課したのはむしろ陸軍の知識修得（長崎海軍伝習所はその名の通り海軍について主に学ぶところ）。赤松も藩の意向を受けて、陸軍の方にシフトをしていく。
- このこともあり、結果的には勝のもとを離れる。その後、小笠原鐘次郎の従者に転身をするため**勝とこの時に、関係が切れてしまったということで、この後、遣米使節団に赤松が参加できなかった大きな要因になっている**のではと私は考える。

④長崎での約 5 年間で、74 冊の蘭書読破。語学力の著しい向上と銃火器・軍馬への強い関心

- 長崎滞在中の約 5 年間に、赤松は 74 冊の蘭書を読破したとされており、卓越した語学力を持っていたとみられる。数学ができるうえに、語学がちゃんと出来るという点、オランダ語をマスターして、その後に英語もマスターする。そのぐらいの語学力を持っていたということ。
- 赤松は語学を介して銃火器であるとか軍馬などに関心を寄せていくことになる
- 安政 4 年の 7 月に、オランダ語の原書を「新銃射放論」として翻訳。
- 安政 5 年に、軍馬、馬術について書かれたオランダ語の原書を「選馬説」として翻訳。

⑤オランダ水陸軍練兵学校の教科書（1853 年版）を翻訳した『矢ごろのかね　小銃彀率』（銃隊の教練法なども含む小銃についての専門書）を借財して自費出版

- オランダ水陸軍練兵学校の教科書を翻訳した『矢ごろのかね　小銃彀率』で銃の操作方法や、銃隊の教練法なども含む小銃についての専門書を、借金までして自費出版をした。結果は、売れ行き不振から経済的な窮地に陥ってしまう。

⑥『矢ごろのかね　小銃彀率』出版の事由：**専門書を翻訳した自負、日本の軍事レベルに危機感から時期尚早にもかかわらず、このタイミングで出版**

- 『矢ごろのかね　小銃彀率』を借金までして出版した理由は、はっきりしないが、**専門書を翻訳したという自負**と、その成果を世に問いたかったのではないかと推測される。
- もうひとつの理由としては、**日本の軍事レベルに対する危機感**があったと思われる。

- それと同時に、上田藩でこれ以上立身出世ができるかという問題もあり、兵学者としての名声を早い段階で得たいという思いもあったのではないか。
- 名声を得たのちに、幕府あるいは他藩でしかるべきポジションを得られないかという期待もあったのではないかと思われる。

５．　軍事改革への関与と建白書

①安政 6 年（1859 年）4 月、長崎海軍伝習所の閉鎖により帰府。万延元年遣米使節団（咸臨丸乗船）参加を画策も失敗

- 安政 6 年に、長崎海軍伝習所が閉鎖されて赤松は帰府。
- 翌万延元年に、勝海舟が咸臨丸で行った遣米使節団に参加したいと画策したが不首尾に終わる。
- ①赤松はそもそも海軍から陸軍に転身、②それが原因で勝のもとを離れてしまっている、のがダメだった理由として考えられる。
- さらに、松平忠固が失脚し、もう老中でなかった、つまり幕府中枢にいなかったのが、ダメだった大きな理由と思われる。

②万延元年（1860）3 月、上田藩に帰藩し養父赤松弘の病没により赤松家を相続（組付御徒士格）

- 万延元年に、上田に帰るが養父の赤松弘が病歿し、赤松家を相続することになる。
- 文久元年に「数学測量世話」、文久 2 年の 7 月に「調練調方御用掛」、8 月に「西洋流調練稽古仰出」を拝命するなど、軍事方面で非常に要職についていく。
- 上田藩では、それなりに赤松の軍事的な、軍略や軍事に関する知識に期待をしていた。同年（文久 2 年）には、赤松の意見が通って、オランダ式のライフル銃百挺を上田藩が購入。このように、文久 2 年の段階で、赤松は上田藩の軍事改革に関与する。
- 上田藩の軍事改革に対する赤松の評価は、なおざりなレベルであると強く感じていたのだと思われる。
- また、加増は一石のみで嫌になってしまうレベルだったので、赤松にとってみると上田藩にいてもだめかなっていう思いが出てきたのでは無いだろうか。

③【藩政改革意見書】建白をする意義を岩瀬忠震・勝海舟の言動から学んだ可能性

- この後、赤松は藩政改革意見書を皮切りに建白書を次々に出すようになる。
- 建白書を出すというスタイルを、なぜ赤松が使い続けたのかという理由については、仮説ではあるが、赤松が長崎で接した岩瀬忠震や勝海舟の影響が大きかったのではないかと推測される。
- 岩瀬忠震も勝海舟も建白を行っており、建白をする＝自分を売り込むという政治行動スタイルを、赤松は岩瀬と勝から学んだ可能性があるのではないかと思う。つまり、身分が低い人が表に出るためには、建白をして、それを認めてもらって立身出世するのだということ。

- 建白書を書けること自体が、すごい能力を持っているということ。たとえば坂本龍馬の書いたものは箇条書きで、文章を作る訓練を受けていないので建白書を恐らく書けない。あと、薩摩藩だと大久保が建白書を書いており、長州藩だと久坂玄瑞が素晴らしい建白を書いている。
- 藩政改革意見書のポイントは以下の通りに整理できる。

A） 世上の形勢を明らかに察すること（京都、江戸を始めとする諸藩の情勢や民衆の動向・世論など）軍事改革の形勢なども十分に探索するということは、朝廷や幕府の方針を詳しく知ることになり、上田藩の藩政にも資する。

B） 幕府に準じる同じ行動をするためには、藩士の中から正直で忠義と英才のある人物を 2、3 人（自分も含む）江戸に時々派遣して、政治動向や軍制などを精緻に探索して計画立案の参考にすべき。諸藩に先駆けて、藩政改革を断行することが急務。

C） 藩を挙げて軍政改革をするためには兵学者の育成しかない（自分にやらせて欲しいということ）。兵学者の育成が急務であり、藩校に入らせ熟練に至り江戸に派遣すれば 2 年以内に兵制や器械に精通する人物がどんどん出てくる。また、獲得した軍事技術で兵器を製造することも急務であるということ。

D） 情報というのは非常に重要。そして、藩も逼迫した財政を改善するために倹約をしないとダメだと言っている。

- 遅々として進まない藩政・軍事改革に強い危機感。一方では、自身の登用を要求

④文久 3 年、松代藩士 白川久左衛門近克の娘たかと結婚。同年 4 月、妻の実家を訪ねた際、佐久間象山を訪問。対面は 1 回のみ、手紙の往復、書物の貸し借りを継続。

- 佐久間象山との関係については、赤松が象山から影響を受けたか否かは不明。それほど影響を受けていないのではとも思われる。
- 但し、あまり人のことを褒めないあの象山が赤松を非常に高く評価している点で、赤松の力量、レベルの高さはうかがうことができる。

６． アプリン大尉との出会いと『英国歩兵練法』

①元治元年（1864）9 月、幕府は上田藩に第一次長州征伐への出陣を要請。9 月 12 日、小銃・大砲・弾薬の確保のため、急遽江戸行きの命令

- 元治元年に、幕府は上田藩に第一次長州征伐の出陣を要請。9 月 12 日に、小銃・大砲・弾薬の確保のため、急遽江戸行きの命令が赤松に下される。
- 赤松は、馬具類なども購入するために横浜に行く。この時に上田藩士の門倉の紹介でイギリス公使館付騎馬護衛隊長アプリン大尉と知り合い、横浜と上田を往復して、英語、騎兵操練法・騎兵術を学修する。

- このアプリンとの出会いが赤松の人生の中で物凄く大きいことだと思われる。赤松にとっては、**アプリンの出会いというのは、彼がこの後、軍事戦略家として大成をしていくことに大きな画期となった**と考えられる。
- アプリンがイギリス人だったということ自体が、赤松の人生において特筆すべきことだったと言える。アプリンとの出会いの意義は、そこにあると評価。
- それなりの素養があって、高い語学力がある赤松だからこそ、アプリンは赤松を見込み、さまざまなことを教えたのだと推察される。

②慶応元年（1865）1 月、長州征伐は解兵、一旦帰藩後、直ぐに再出府して横浜との往復を再開し、アプリンに師事

- 慶應元年の 1 月に、第一次長州征伐は解兵になる。長州征伐は結局、薩摩の藩論転換ということもあって、長州藩を生かすことになった。
- 赤松はもちろん京都から一旦、帰藩してすぐに、再び江戸に行き、横浜との間を往復してアプリンに学んでいる。
- 江戸に再度出られてアプリンに学び続けることが可能となった理由は、第二次長州征伐がもう迫っており、上田藩は引き続き軍備を強化する必要があったためと思われる。
- この時、イギリスの兵書翻訳を依頼されて下曽根塾に再度入門する。下曽根は『英国歩兵練法』という本を購入して、その翻訳を赤松に依頼する。ただし、赤松も多忙のため一人では無理だということで、加賀藩士の浅津氏と分担翻訳をした。
- 今回は、自費出版ではなくて、出版費用と翻訳料は下曽根が負担してくれた。

③将軍進発（長州再征）のため、上田藩も赤松兄弟を含む 1,000 人の藩士が従軍。閏 5 月 15 日、海路大坂着。従軍中も翻訳を継続、原稿を飛脚便で江戸に送付

- 慶応元年から始まる長州再征（第二次長州征伐。幕長戦争とも言われる）には、上田藩からも赤松兄弟を含む 1,000 人の藩士が従軍する。上田藩も相当、出費が多かったと推測される。
- 赤松は 5 月 15 日に大阪に着き、翻訳を継続していた。原稿を江戸に飛脚で送るというようなことをしていた。
- 慶応 2 年 3 月に、第 1 編から第 5 篇になる『英国歩兵練法』が出版された。

④日本の陸軍の現状に対する危機感を誰よりも抱き、陸軍を近代化して世界に御するレベルに至急引き上げる必要性を痛感。刊行は軍事戦略家としての名声向上に寄与

- 日本の陸軍の現状というのは非常にレベルが低いとの認識と危機感を、赤松は誰よりも抱いていたことは間違いないと思われる。陸軍を近代化して世界と同じようなレベルにしたい。レベルを引き上げなければ、日本はやられてしまう。そういう必要性を痛感していた。
- もちろん、それに付随して、出版により軍事戦略家としての名声にも当然つながると考えていたと思われる。

- 特に強調したい点は、**オランダ式でなく、イギリス式歩兵練法を赤松は初めて翻訳した。翻訳して、刊行した事実というのが極めて重要**だということ。本書は、**イギリス式の兵学の日本における最初の公式的な存在。**赤松が軍事戦略家としてトップランナーだった証拠であり、**ここがもう一回、彼を私たちが再評価すべき非常に重要な点**だと思われる。
- 今回の講演にあたって、赤松の研究をやっている方々に赤松の評価を聞いてみたところ、ほぼ皆さんが言うのは、赤松はイギリス式を初めて日本に入れた人だと、極めて高い評価を受けていることが分かった。
- イギリス式は当時の日本にはなく、赤松が最初だったということ。そして、イギリス式ということになったので、薩摩藩との関係もできる。

⑤文久 3 年以降、薩摩藩はイギリスと戦火を交えており、イギリスの軍事に高い関心が集中し、『英国歩兵練法』への高い関心を寄せていたことは疑いなし

- 薩摩藩は生麦事件から始まって、薩英戦争が起こったため、イギリス軍人、イギリス軍の軍事に高い関心があった。そこに、この『英国歩兵練法』が出たことで、**赤松が翻訳した『英国歩兵練法』によって、薩摩藩が赤松に注目するその最初の可能性**になったというふうに考えたい。

７．　幕府宛建白書（慶応２年８月）

①長州再征の敗北を明言

- 長州再征の敗北を明言。今回の長州再征の軍備は軍勢を指揮するものの戦略が稚拙である、諸藩は命令に従わず、兵器も兵力も乏しく、兵法が成り立たず。各軍は不一致で、兵の割り当ては不適当で勝算がないことは一目瞭然であると全部言い当てている。

②政事における人材登用の急務

- 「政事における人材登用の急務」について。ここでは、人選は家柄や禄高に少しも関係がない特別な方法によって、身分の低い者は家臣の家来でもその身一代に限って老中・若年寄といった人選を行っても良いのではないか。能力に応じて高位高禄に取り立てて、国中で知略と身分に整合性を持たせ、人材を選んで政治を行わせれば世の中に波乱は起きないし、国威振張の源になるということである。明治になっても、ここまでの人材登用というのはできておらず、もう現代の人材登用と言っても良いくらいである。

③イギリス・アメリカに準じた陸海軍の創生

- 「イギリス・アメリカに準じた陸海軍の創生」について。赤松がフランスではなく、イギリス、アメリカを挙げていること。幕府が、少しフランスに傾いていることもわかっている中で、英米を挙げている点が注目される。米国は南北戦争を経て、国際舞台に出てくるところで、英米に目をつけた赤松というのは慧眼であると言える。

- まずは、幕府直属の兵を増やすべし。軍制は世界中の優れた戦法・武器を採用し、特にイギリスとアメリカ両国の制度は精緻で実用的に便利であり、日本の地理や国民性に適している。英国は海洋国家で、米国は当時の新興国。こういった、両国の制度に基づいて整備され、成立している優れた武器をすべて装備して、それぞれの能力に応じた司令官とか、諸官吏を選んで幕府の陸海軍を早急に強くして備えることが急務としている。

④軍制における四民平等の人材抜擢

- 次に「軍制における四民平等の人材抜擢」について。諸長官、本当の幹部クラス、つまり上の人たちは、旗本で良いが、それ以下の人、それ以下の長官などは家柄身分は関係ないのだと言っている。身分の低い者や家臣の家来、あるいは商人や農民でも学識があれば抜擢して、国中の能力と身分の序列にいささかも違いがないようにすれば、諸軍一致の兵制が確立し、いつ戦争になってもその指揮によって任務を遂行することが可能である。つまり、能力さえあれば関係ないっていうことを言い切っている。

⑤幕長戦争における幕府の敗北を明言し、幕政における全国レベルでの人材登用、近代的陸海軍の創設、国民軍への四民平等に基づく参加を提言

- 幕長戦争、第二次長州征伐における幕府の敗北を明言しているということ。そして、幕府の政治における全国レベルでの人材登用、近代的陸海軍の創設、国民運営の四民平等に基づく参加、政治への参画を求めるということは、譜代藩の家臣である赤松が幕長戦争を実質的に批判していることでもある。そしてこれらの建白は幕府の政治にオール武士層の能力主義による登用を促して、条件付きながら国民皆兵を提言する画期的なものだというふうに考えられる。
- 一方、幕府に対しては極めて不遜な内容。言い過ぎではないかというような内容もあり、上田藩にも害が及びかねない内容もある。
- **軍事戦略家としては、幕府主導の身分制を否定する国民皆兵軍の創生。徹底した能力主義と軍隊の西洋化を提言しているということですね。一方では、自身の幕臣への登用を期待した。大胆極まりなく、上田藩にとっては、赤松の能力を認めながらも、こんな建白を出されたら、ちょっと厄介である。**赤松は、そういう存在としても、認知されていたのではないかと思われる。

８．　上田藩主松平忠礼宛建白書（慶応２年９月）

①能力主義の徹底と藩主のリーダーシップ

- 上田藩主松平忠礼に対する建白書について。能力主義の敵は何か、藩主のリーダーシップとは何か、を説いたもの。前例重視とか融通が利かない、そういう法令・法律や取り決めは、もうすべて廃止すべきである。身分の上下による藩士の隔たりも廃止す

べきである。軽輩の者であっても言路洞開となるよう改め、そういう雰囲気を作れということを述べている。

- 制度を作って、そして人材を登用する。人材を選任するときには家柄、身分や禄高に一切こだわらず、その人たちの学問や知略から選ぶ。
- 赤松みたいな人を選ばないとダメだということで、赤松もやはり身分の壁があると考えており、自分も登用されたいので、身分の壁は壊したいという背景がかなり伝わってくる。たとえ軽輩の者であっても日頃から面会して十分に話をするようにしないとだめで、藩主自らが面談をして直接人を選ぶべきだ、と言っている。
- 世襲についても言及しており、その任に適したものは一代限りでいいから、その高い役職で高位高禄で取り立てるべきであるとしている。つまり、武士の身分制度を無くせということである。武士の間での身分の上下を廃止する。それが富国強兵の基本であり、この他に方策は無いと言っている。

②藩主自らの軍学修学・軍政改革

- 藩主自らの軍学修学・軍制改革について。若い藩主自らも軍学を学び、軍制改革に励むべきということ。すでに近頃、兵制や軍事訓練を私（赤松）に頼みに来た他の藩主の中には、若い藩主であっても自ら西洋諸国の兵書を調べ、洋書で学び、軍事訓練の指揮をとって兵制改革などを実施しているということであるので、あなたもそうしなさいと言っている。

☆③若き藩主（17 歳）主導による徹底した早急な藩政改革

- 松平忠礼は、松平忠固の次だが、17 歳の藩主に対して、藩主主導による徹底した早急な藩政改革を要求してこの建白を閉じている。
- この建白に書かれている以上のことを知りたかったら、赤松に尋ねれば良い。万国の法則や日本中の諸藩の形勢等を詳しく申し上げたいと、大変な自信を披露している。自分をもっと使えと、藩主に対して言っている。さらに、もうほかの藩からはスカウトが来ているよということも言っている。

④藩主に対して遠慮がない諫言的建白書

- 現状では、上田藩で登用される可能性が少ないと見たのだと思われる。なぜなら、通常のパターンではなく、直接的に自分を売り込んで行こうと動いているからだ。自分のような優れた人材を使わない手はないだろう。でも、今の藩の仕組みでは難しいので、藩主のリーダーシップによって、こういう改革をやって能力ある人を登用して早く改革を進めましょうということである。
- **能力主義の徹底を求めて、英明な藩主がリーダーシップを遺憾なく発揮しながら、率先して藩政改革の実行を要求**している。下級藩士が上申する内容としては極めて不遜で過激と思われ、藩要路の警戒を受けたのではないだろうか

⑤「既に近来私え兵制練兵の儀御頼みにて御出入り仕り候諸侯」「御直々御尋ねに相成り候はゞ万国の法則及び日本列藩の形勢等、委細に申し上げ奉るべく候」

- 前藩主の松平忠固だったら、このような改革をやったかもしれないという可能性を少し感じる。それ以前に、赤松をもっと登用していたかもしれない。
- ただし、忠固も、他藩から来た養子であるにもかかわらず、強いリーダーシップ、向上心というものがあって、老中になったわけですから。そういったものが、上田藩の藩風に果たしてあっていたのかどうかは疑問。
- 同時に、赤松という存在が上田藩の藩風に合っていたのかどうかっていうのは、少し考察が必要と考える。実際は、次の９で述べるように、赤松のところに幕府からスカウトが来ることになる。

９．　幕府仕官の失敗と上田藩との関係

①幕府仕官を志向し、幕府宛建白書（慶応２年８月）を作成。仮説の域を出ないが、下曽根金三郎に仲介を依頼して幕臣（陸軍所歩兵差図役または講武所砲術教授方）への登用企図

- 幕府宛ての建白書は、赤松が幕府への仕官を期して作成したものと考えられ、少なくとも下曽根金三郎を介して幕臣には伝わったのではと推測される。
- 赤松自身は、陸軍所歩兵差図役、講武所砲術教授方などでの幕臣としての登用を希望していたとみられる。
- 慶応２年 11 月に、幕府は上田藩に対して開成所教授手伝出役として赤松の出向を要請。譜代藩に対して、幕府への出向を依頼したにもかかわらず、驚いたことに上田藩は拒否しており、これが、私には非常に不思議に思える。
- 譜代藩にとっては、藩士の幕府への登用はむしろ光栄なことのはずなのに、上田藩は拒否している。赤松は、藩の枠を超えて活躍することを期しており、幕臣になっていく可能性もあり、藩の側では何らかの不信感があった可能性もある。藩主にこんなこと言ってしまったとか、反対してこんなことを建白するな、というように、赤松の才能に対する嫉妬みたいなものがあったかもしれない。
- 藩のために使うから幕府に出向させられないと言っているのにもかかわらず、赤松が京都で活躍したら矛盾する。上田藩としては、赤松を早く京都から連れ戻さないといけない状況となるわけである。

②上田藩との複雑な関係―柔太郎宛書簡（慶応３年３月 10 日）

- この頃、兄の柔太郎との書簡では、「結局、上田で事を起こし、それを日本中に知らしめることは不可能であるが、日本で事を起こせば自然と上田藩でも事を起こせるはずである」という趣旨のことを書いている。つまり、幕府に登用されて、幕府の仕事をしたい。上田藩で何かしたとしても、それは上田藩のことでしかない。要は、上田には不帰、京都に留まりたいという意味であると考えられる。表向きは、もう痔のために動けませんということにして、上田には帰れませんという意味である。

- 幕府への仕官は叶わないということなので、会津藩の藩校洋学所と薩摩塾を同時に掌るのだと言っている。この頃から、赤松は**軍事戦略家として会津藩や薩摩藩などの大藩に依拠した活動を重視**するというふうに変わったとみられる。

③幕府への士官は叶わず、会津藩の藩校洋学所と薩摩塾を同時に掌ると伝え、上田藩を見限って帰国命令に反して痔疾と仮病を使って滞京。そもそも、上田藩での立身出世は不可能であり、かつ幕府出向を拒否する藩に絶望感。藩を軽視した在京活動を展開

- さらに、兄の柔太郎宛書簡では、赤松も陸軍方に周旋をして、要するに自分を登用して欲しいということを働きかけているのだが、赤松の実力は買っているのだが、上田藩がダメだと言っているので難しいなどと書かれている。そして、上田藩が拒否するなんてことは、あるまじき行為だというふうに幕府では言われている、と兄に伝えている。
- **上田藩に対する怨嗟とも言えるような恨み節で、軍事戦略家としての登用を断念**するという内容の書簡である。

④上田藩周旋方就任への期待

- この後に、赤松は京都での上田藩周旋方に就こうということを考えていたようである。会津藩などの大藩は京都に周旋方を置き、京都での活動を主としていた。周旋方の中には、政治活動を行う人もいるわけで、これに上田藩は自分を指名してほしい、と赤松は言っている。
- **この頃に、上田藩にとどまりながら、周旋なら京都周旋方に就いて、在京資格を得ながら、他藩士とも一緒になって国事周旋を実行する。そういう方向に転換**したのではないかというふうに思われる。

１０．　家塾・薩摩塾の誕生と「重訂英国歩兵練法」

①家塾（天雲塾との呼称あり）の開設時期には諸説あり。兄柔太郎宛書簡（慶応 2 年 10 月 26 日）は断片しか現存しないが、そこは記載がなく、肥後藩から英式兵学、会津藩から蘭書翻訳依頼の記載あり

- 赤松が自ら開設した家塾は、開設時期の特定が難しい。慶応 2 年 10 月 26 日の兄宛ての書簡では記載がない。ただし、肥後藩から英式兵学とか、会津藩から蘭書の翻訳依頼をされているということは書かれている。一方、越前藩の周旋方である酒井十之丞の書簡（毛受鹿之助宛書簡）には、家塾のことが唐突に出てきており、恐らく慶應 2 年 11 月ぐらいの段階で、もう家塾が存在していたのではないかと思われる。翌年の 3 月 10 日にはもう「小生塾」と言っていますから、完全に塾がある。
- **家塾の開設を上田藩が許可した段階で、もう赤松を上田藩は使う意思がないことがわかる。それなら、赤松としては、塾を運営しながら、幕府や大藩への戦略家としての仕官を模索する方向を検討することになる。**

②下曽根塾の後輩に当たる薩摩藩士野津道貫の推薦によって、薩摩塾を開設。

- 薩摩塾については、下曽根塾の後輩である薩摩藩士の野津道貫が推薦して、薩摩塾を開設したことは間違いないと思われる。開設の時期は、史料によれば、慶応 3 年 3 月 10 日から 3 月末までの間になるのではと、現段階では推測している。そして、家塾を薩摩藩邸内に移設をして一本化する

③薩摩塾は他藩の希望者も入塾可能、薩摩藩士約 50 名のほか越前藩士、大垣藩士等が入塾。授業科目は英国式兵学（歩兵、騎兵、射撃）、西洋戦史、航海術、算術等、英語等

- 薩摩塾は、薩摩藩士を優先して英国式兵学を修得させる目的であった一方、他藩の希望者にも入塾を許していた。薩摩藩士は約 50 人、越前藩や大垣藩などからも入塾をしてきた。
- 授業科目は、英国式兵学はもちろん、西洋戦史、航海術、算術、英語まで教えていた。そして、この塾生には初代塾頭の野津道貫、二代目の塾頭が野津鎮雄で、桐野利秋、村田新八等々の明治時代の海軍・陸軍のリーダーに成長する人たちがいた。薩摩藩のこういった明治以降に軍人として活躍した人たちが軒並み赤松門下でいるということ。

④慶応 3 年（1867）5 月、「英国歩兵練法」（1864 年増補改訂版）の原書を翻訳した「重訂英国歩兵練法」（薩摩版）を刊行。全 7 編 9 冊、表紙の色から「赤本」と呼称

- 慶應 3 年 5 月に、「英国歩兵練法」の改訂版が出ており、その原書を薩摩藩の依頼で刊行した。赤松単独による翻訳とみられる

⑤薩摩藩がどのタイミングで依頼をしたか不分明。酒井十之丞書簡（慶応 2 年 11 月 16 日、毛受鹿之助宛）には、「赤松は何程の者に候や元来薩より差留置候もの故、今朝青山小三郎を遣し篤と探索を為致候事」と記載

- 薩摩藩が赤松にこの本の翻訳を依頼した時期は不明。但し、慶應 2 年 11 月 16 日の越前藩の酒井の書簡では「赤松は何程の者に候や元来薩より差留置候もの」とあり、この差留置を解釈すると依頼のタイミングはこの頃ではないかと思われる。
- 刊行は四侯会議でやってきた島津久光の上京に合わせた可能性が高い。**赤松は、久光から最新の騎兵銃を拝領している。この段階で、薩摩藩と赤松さんは蜜月状態であったとみられ、薩摩藩への仕官の可能性も否定できない。**そういう時期であったかと思われる。

１１．　幕府・越前藩・薩摩藩への「建白七策」

①四侯会議開催に合わせ、慶応 3 年 5 月に幕府（徳川慶喜）・薩摩藩（島津久光）・越前藩（松平春嶽、5 月 17 日）に提出

- 幕府・越前藩・薩摩藩への「建白七策」については、四侯会議に合わせてこの建白が出されたというタイミングが非常に重要。

- この建白が出されたのは慶応３年５月で、幕府の徳川慶喜、薩摩藩の島津久光、越前藩の松平春嶽宛で、越前藩には５月 17 日に出した。土佐藩と宇和島藩には提出していないが、この三藩に出しておけば伝わるだろうと思っていたとみられる。

②幕長戦争での幕府・譜代連合の敗退（＋上田藩の無関心への嫌気）を機に、幕府主体の身分制解体を前提とする国民皆兵の欧米的近代軍隊の創世に見切りを付け、この段階から幕府と西国雄藩、特に薩摩藩との融和による実現に方向転換

- このタイミング（慶応３年５月）に建白を出した背景としては、前年に幕長戦争で幕府・譜代連合が敗退、上田藩の赤松に対する無関心への嫌気、それを機に赤松の中で幕府主体の身分制解体を前提とする国民皆兵の欧米的近代軍隊の創生に見切りを付けたと言うことがあると考えられる。この段階からは幕府と西国雄藩、特に薩摩藩との融和による実現に方向転換をしたのではないかと思われる。
- そして、**譜代小藩の上田藩士であるため、やはり幕府を排除できず、幕府と一緒に西国雄藩の連携ということが前提になって行く。特に、幕薩融和を意識した行動**が、ここで始まったのではないかと考えられる。

③内容は多少の異同があるにしても、基本同一と見なせるもので、直筆が残存する薩摩藩宛をベースに検討することが肝要（越前藩宛について、『続再夢紀事』は誤植の可能性があり、薩摩藩側の『忠義公史料』4（史料番号 426）の「雇教師赤松小三郎＜松平慶永宛＞」の使用がベター）

- 幕府、越前、薩摩に建白された内容は基本的に同一のものだと思われるが、薩摩藩宛ての直筆が現存している。このため、現在の鹿児島にあるものをベースに検討すべきあろうと思う。そして、『続再夢紀事』には誤植のものが載っている可能性があるため、薩摩藩側の『忠義公史料』の「雇教師赤松小三郎＜松平慶永宛＞」の使用がベター。薩摩藩に提出したものをベースに考えるのが良いのではないかと私は考える。
- 幕府宛ての建白書は 11 月に盛岡藩が写しを入手している。鳥取藩の記録にも、建白の写しを手に入れているという記載がある。これらから判断すると、**相当広い範囲に赤松の建白書が流布していることは間違いないだろう。**

④内容の吟味、その他の構想との比較については諸書に譲るが、『西洋事情』を参考に日本にカスタマイズしたものであり、大同小異ながら同様な構想はある程度共有

- この建白の分析等については、今までも非常に議論や研究が進んでいるため割愛。
- 内容は、慶応２年 10 月に出た『西洋事情』という本を参考に日本向けにカスタマイズしたというものであって、似たような構想はある程度共有されていたのではないだろうか。
- 赤松の建白の価値は、**これを明文化した、この構想を初めて文章化したということが、極めて重要であるというふうに思う。**
- **しかも、この四侯会議のタイミングで出すという非常に政治的なセンスというものを感じる。**

１２．　会津藩との関係と「幕薩一和」

①慶応２年（1866）11 月、会津藩が赤松の英国式兵学に興味を示し、銃隊調練稽古を依頼

- 慶應２年 11 月に、会津藩が赤松の英国式兵学に興味を示し、会津藩士の山本覚馬が赤松に銃隊調練稽古を依頼する。
- 山本覚馬の依頼を受けて、赤松は会津藩が設置した洋楽所顧問に就任。同時に西周も就任しており、西周と赤松は当然関係があるとして良い。
- 重要な点は、単なる顧問だけではなくて、実際の調練もやっているということ。

②会津藩による引き留め工作－柔太郎宛書簡（慶応３年７月 16 日）

- このころ赤松が兄に宛てた手紙では、会津藩は赤松の在京を求めており、幕府や京都留守居役に帰藩させないでほしいということを要請。上田藩にも書面でそれを要請していると書いている
- 兄にも、在藩の家老に、赤松が帰藩しないように説得してほしいと依頼している
- 一方、会津藩から幕府、上田藩に非常に積極的で執拗な赤松滞京運動というようなものが継続している
- この会津藩の真意は、もちろん赤松に会津藩の演習、それと訓練を続けてほしいというものであり、「京阪御用状往復留」という史料では、会津藩の公用人の外嶋機兵衛から、赤座という上田藩の留守居代および、留守居役の山田に対して、引き続き軍事訓練の担当の依頼をしている

③会津藩の真意について、「京阪御用状往復留」（上田藩庁文書、６月 29 日付上田藩留守居代赤座寿兵衛書簡、岡部九郎兵衛他宛）によると、会津藩（公用人 外嶋機兵衛）から赤座および留守居役山田貫兵衛に対し、引き続きの軍事調練の担当を依頼

- 合わせて、会津藩側は、**薩摩藩にも軍事朝練等を赤松は行っていることから、近頃諸藩と付き合いを控えてその動向が把握できずに何を考えているか分からない薩摩藩の動向探索を、赤松にやってほしいのだと。それが徳川家および譜代藩の利益になる**といっている。
- 要は、会津藩から上田藩に対して赤松にスパイをさせて欲しいという話で、薩摩藩の情報が全く入らないので薩摩藩の情報を赤松から知りたいという趣旨。

④上田藩・赤座の反応

- これに対して上田藩の留守居代の赤座は、赤松は薩摩藩と接点があるのは都合が良いし、会津藩の公用人からの話があるので、会津藩の意向に沿ってしばらくの間はそのまま赤松を京都に居させた方が良いのと答えている。
- 万が一、薩摩藩にスパイが漏れると不都合なので、赤松本人にはスパイをしろとまでは伝えないで、会津藩公用人に赤松を当分預ける格好にしておこうとしている。
- 重要な点は史料の中で、赤松は身分不相応なことに尽力している。赤松は本来やるべきこと以外のことをやっている。不都合なことではあるけれども、これも今の形勢か

ら仕方なく放置していたのだ。とされている点。上田藩の在京要路の人たちは、会津藩の要請を受け入れて赤松の滞京を認めることを国元重役に打診し、赤松の周旋活動を苦々しく感じていながらも、譜代藩として会津藩への協力を画策をしているということである。

⑤幕薩融和の周旋実態

- 幕薩融和の周旋実態については、兄・柔太郎宛ての書簡と、山本覚馬の文書に記録がある。まず、兄に対しては、幕薩一和の端緒を開こうと考え、薩摩藩側では西郷隆盛に掛け合い、幕府側では会津藩公用人（恐らく山本覚馬）、梅沢孫太郎、永井玄蕃公などにも幕薩一和を説いており、少しは成功の見込みが出てきているという内容。
- 山本覚馬は「赤松を頼って薩摩藩の小松帯刀、西郷と面談して幕薩一和を申し述べたところ、同意ということなので、幕府の目付、梅沢や永井にも掛け合ったが取り合ってもらえなかった。でもその後も奔走を続けたのだ」というふうに言っている。
- ここで、幕薩一和の実現のために、赤松と会津藩士の山本覚馬と連携をしているという事実が出てくる。
- この辺り、薩摩でも色々な考え方が出てきて、幕府と対抗すべきとか、ちょっとそれも難しいかもしれないので、幕府にパイも残しておこうとか、そういう複雑な政治状況の中に赤松は気が付いたら足を踏み入れたってこと。私はこのことは、すごく評価したい点である。
- 赤松は、幕府と薩摩の一和の実現のために山本覚馬と連携したりしていることが、あまり知られてない事実であると思われる。
- この幕薩一和運動というのは、幕末政治における画期的な出来事のひとつであると思う。これが形を変えて大政奉還運動に連動していくことで、大政奉還後に慶喜が奉還をしたことによって薩摩藩の中でも考え方が割れてくる。
- その小松帯刀や坂本龍馬による政体構想、つまり幕府の機構を一部残す、幕府の要人も取り込むということが、慶喜をどうするかという問題にもつながってくる。この運動は、そういう問題にも接続していることだとして、幕末政治史において位置づける必要があるのではないかと思う。幕薩一和運動というものがその後の政局に、影響を与えるという意味においてここは評価すべき。

１３．　赤松暗殺の実相

①上田藩による帰藩厳命により、一旦帰藩する決心。薩摩藩にスパイと見なされ、慶応３年９月３日 16 時頃、京都東洞院通で薩摩藩士桐野利秋（中村半次郎）、田代五郎左衛門によって暗殺

- 赤松は薩摩藩でスパイと見なされて、慶応３年９月３日に、桐野利秋によって暗殺をされた。

②桐野は探索を任務としており、赤松の挙動を監視してスパイと断定。確かに、会津藩から

上田藩に赤松をして探索させる依頼をしているものの、実行したかどうかは不分明

- 桐野は、スパイを取り締まり、つまり探索を任務としており、赤松の挙動を監視していて、スパイであると彼は断定した。確かに、会津藩から上田藩に赤松をして探索をさせる、スパイを依頼しているわけだが、赤松が実行したとの証拠は何もない。ただし、**赤松は幕薩一和を考えて周旋活動をしているわけですから、当然、必要に応じて薩摩藩の情報を幕薩一和のために開陳している可能性がある**。
- 赤松はスパイをしているという意識はないが、薩摩藩の情報を相手にあげることによって、薩摩と協力して行こうぐらいは言っている可能性あり。これが、嫌疑を受けたと可能性も。
- あるいは、桐野が、会津藩からあの上田藩にこんな依頼が行っているって事をどこかで掴んだということもゼロとは言いきれず、もしそうなら、会津藩の依頼を断れなかった上田藩という点で、**上田藩士であった赤松、上田藩というところの悲劇**であったと言える。

③桐野は単独で動ける権限を有していたと考えられるが、事前に西郷に告知していた可能性あり。なお、最低限、桐野は事後報告していたはずであり、薩摩藩（少なくとも要路）はその事実を共有か。

- 桐野は単独で動ける権限は有していたが、西郷に最後には、暗殺の事実を伝えていた可能性はある。最終的には、最低限、桐野は西郷にやったことは言ったのではないかと思われる。
- 事前に西郷の許可を取ったか、取らなかったかは分からないが、桐野は少なくとも、その後、隠し通している。

14. 幕末政治と赤松小三郎

赤松をどういうふうに幕末政治の中で位置づけるべきなのか？

①赤松小三郎の評価を、「建白七策」の先見的な内容からアプローチし過ぎることを避け、政治（変革）家としての立場を過度に強調することを控え、まずは英式兵学を我が国に最初にもたらした軍事戦略家の側面を高く評価すべきであり、軍事史学における赤松の再評価を期待する。

- 赤松小三郎の評価で、「建白七策」の先見的な内容からアプローチし過ぎることは避けた方が良い。
- 政治変革者、政治家としての立場を過度に強調することを控えて、まずは英式兵学を我が国に最初にもたらした軍事戦略家の側面を高く評価すべきであり、軍事史学における赤松の再評価を期待している。

②「建白七策」について、譜代小藩の上田藩士であるため幕府を排除できず、幕府と西国雄藩の連携、特に幕薩融和を意識し四侯会議に合わせて建白をしており、こうした構想を日本で初めて明文化したことが極めて重要であり、このタイミングで建白した政治的センスに

重きを置くべき事象と位置づける

- 「建白七策」については、譜代小藩の上田藩であるために幕府を排除できず、幕府と西国雄藩の連携、特に幕薩融和を意識し四侯会議のタイミングに合わせて建白した
- こうした構想を、日本で初めて明文化したってことが極めて重要である。
- また、このタイミングで建白したという政治的センスに重きを置く事象である。

③「幕薩一和」運動について、幕末政治における画期的な事象であり、実は形を変えて、大政奉還運動に連動し、更には大政奉還後の小松帯刀や坂本龍馬による政体構想に接続したと考える。この周旋活動は、幕末政治史における極めて重要なものと判断する。

- 幕薩一和は、幕末政治における画期的な事象である。形を変えて、大政奉還運動に連動して、さらに大政奉還後の小松帯刀や坂本龍馬の政体構想に接続したのではないかと考える。
- 私は今、慶應義塾の薩摩藩の研究を行っているが、赤松の考え方も少しわかったので、これも次に研究の中に生かしていきたい。

④赤松小三郎の非業の死は、日本軍事史において痛恨事であるとともに、政治史においても有能なインストラクチャーを喪失したと断言しても、過大評価にはならないと確信する。

- 赤松の非業の死というのは、まず、日本軍事史において痛恨の出来事。赤松はもし暗殺されなければ、欧米に留学し軍事を学んで帰ってきて、日本の陸軍などの専門家として、非常に大きな足跡を残したと思われる。
- 政治史においても、有能なインフラストラクチャーを喪失したという点が非常に残念である。彼が生きていれば殖産興業や、富国強兵の局面での活躍が見られたかもしれない。

（結び）

以上、赤松については人生を俯瞰しながら、赤松の再評価ということで、現時点での結論を述べさせていただいた。

以上

（報告者）
赤松小三郎研究会事務局
西澤澄雄（79 期）

令和 5 年 11 月 26 日（日）
神田外語大学教授　町田明広

幕末政治と赤松小三郎

１．人物研究のポイントとは

① 歴史の叙述とは、執筆者による「解釈」に基づいたもの　⇒　「解釈」の違いが生じる原因は、「解釈」する際に着目する史料や先行研究の違いであり、その読み込みの程度の差　⇒　「解釈」の対象となる歴史的事象について、その周辺事情に関するものを博捜（史料・文献などを広範囲にわたって探し求めること）するレベルや研究の深化の度合いからも派生

② 人物の叙述においても、執筆者それぞれの研究成果から導き出された「解釈」を基に叙述　⇒　執筆者は自らが選定する人物に対して、何らかの興味関心があり、その人物に対するイメージはプラスに傾くことは自明　⇒　人物を通して歴史を叙述する場合、その人物の好悪や先入観を極力遠ざけ、客観的にその人物を捉えることが必要。人物顕彰に陥ってはならず、マイナス部分にも目配りする配慮

③ 分析視角として、思想や行動をその人物の個性のみに求めるのではなく、それらを規定した同時代の秩序・観念や政治・経済・社会・文化といったすべての生活領域に及ぶ規範から、人物を丁寧に説き起こすことを意識　⇒　研究手法としては、伝説化された側面が強い人物については、主として一次史料に基づいて虚構を排除し、歴史に埋もれた無名に近い人物については、史料群の中から再発見し、実像を体系的に明らかに描き出すことを主眼

④ 伝説化された人物には、政治史と人物像の乖離を正しく認識し、人物把握と政治史との照合を丹念に行い、政治史における人物評価をやり直すことによって、歪んでしまった政治史に矯正を施す必要　⇒　歴史に埋もれた人物については、政治史における人物発見を行い、人物研究を実証研究へ取り込み、実証研究における人物的視角の重要性を十二分に意識しながら、人物研究から見える新たな政治史を構築する必要　⇒　<u>赤松小三郎は典型的な存在</u>

⑤ こうした分析視角・研究手法を用いて、人物研究を行うことによって、政治過程そのものの検討を深化させることができると確信

２．赤松小三郎の一般的理解

① 幕末維新期の重要人物にもかかわらず、ほぼ知られていない実態。極端に過小評価された人物

没年：慶応 3.9.3(1867.9.30)　生年：天保 2.4.4(1831.5.15) 幕末の洋学者,兵法家。名は友裕。信州(長野県)上田藩士芦田勘兵衛の次男。18 歳で江戸に出て蘭学を学び,帰藩後赤松弘の後嗣となる。安政 2(1855)年再び江戸に遊学,勝海舟の塾で兵学を修得。次いで勝と長崎に赴き海軍伝習所で航海術を学ぶ。このころ英国兵書の翻訳を志し,慶応 2(1866)年,『英国歩兵練法』の書名で出版,洋式兵法家として広くその名を知られるようになる。同年京都に出て家塾を開く一方,薩摩藩に招かれ同藩士に教授,薩摩を中心に多くの門人を得るに至る。藩命に接し上田への帰藩途上京都で暗殺された。その才が幕府側に利用されるのを惜しんだ薩摩藩士の仕業といわれる。人となり磊落不羈にして経綸の才があった。（朝日日本歴史人物事典）

② “知られざる偉人”となった背景として、慶応 3 年と言う早い時期に暗殺されたこと、犯人が薩摩藩士であったことなどから、歴史に埋没し、その功績は坂本龍馬等に横取りされたため

③ 本講演の目的は、赤松小三郎の人物像を先行研究に留意しながら再度点検し、その事績を検証しながら、幕末政治史の中で再度位置づけること。その際、「建白七策」から政治（変革）家との側面が強調されるが、軍事戦略家の側面を再確認すること

３．赤松小三郎の生い立ち

① 天保２年（1831）４月４日、上田藩士芦田勘兵衛（家禄 10 石３人扶持、藩校明倫堂の句読師）の次男として城下・木町で生まれ、幼名は清次郎、兄は柔太郎　⇒　老中を出す譜代小藩上田藩で、赤貧の下級藩士に生まれた事実は、その後の赤松小三郎を規定する最重要要素

② 藩校に通いながら、叔父の藩士植村重遠から和算（数学）を兄とともに修学　⇒　嘉永元年（1848）、藩士森田斐雄らと江戸遊学開始。幕臣で和算大家内田弥太郎の瑪得瑪弟加（まてまちか、Mathematica《数学の意》）　塾で和算を始め測量・天文・暦学・地理・蘭学を幅広く５年ほど修得　⇒　嘉永５年（1852）、内田の紹介で幕臣・高島流砲術家の下曽根金三郎から蘭学、砲術を修得。兵学の素養を獲得、兵法家への起点　⇒　長期に及ぶ修学は赤松の優秀さ、藩の大きな期待の証左　⇒　兄の柔太郎は嘉永５年から江戸遊学、昌平坂学問所に入学

③ 安政元年（1854 年）、一旦帰藩し赤松家（10 石３人扶持、下級藩士）の養子。数学助教兼操練世話役に登用　⇒　家督相続前の就任は藩政府の多大な期待

４．勝塾入門と長崎海軍伝習所

① 安政元年、更なる兵法修学のため、再度出府。上田藩士山田貫兵衛（西洋流砲術世話役）の長男純一郎が海舟門下生であり、その仲介で勝海舟の兵学・蘭学塾に入門　⇒　安政２年（1855）10 月 20 日、藩から長崎海軍伝習所の一期生となる勝海舟に依頼し、その従者として幕府の軍艦昌平丸で海路長崎入り　⇒　幕府要人の岩瀬忠震・永井尚志・木村喜毅らと接触の可能性

② 勝の内侍として員外聴講生の資格で語学、航海、造船、数学、測量、砲術等を学修。長崎遊学のため上田藩から組付御徒士（2 人扶持支給）拝命　⇒　上田藩が長崎派遣を容認して後押しした背景として、老中松平忠固（文化９年（1812）～安政６（1859）、在任 1848～ 1855、 1857～ 1858）の存在

③ 安政４年（1857）３月、海軍ではなく、陸軍を選択したため、勝の許を辞して小笠原鐘次郎（書院番戸川伊豆守組）の従者に転身　⇒　藩は欧米種の馬についての知識習得を課題とし、小笠原が騎兵学を学んでいたため。勝がどのような反応であったのかは不分明　⇒　結果として、勝との公的な関係が途絶えたことが、遣米使節団に参加できない主因か

④ 長崎での約５年間で、74 冊の蘭書読破。語学力の著しい向上と銃火器・軍馬への強い関心　⇒　安政４年７月、オランダ語原書（1855 年版）を「新銃射放論」として翻訳。安政５年（1858）、軍馬、馬術について書かれたオランダ語原書を「選馬説」として翻訳

⑤ オランダ水陸軍練兵学校の教科書（1853 年版）を翻訳した『矢ごろのかね　小銃彀率』（銃隊の教練法なども含む小銃についての専門書）を借財して自費出版　⇒　洋式兵学者として一定の認知はされたかも知れないが、売れ行き不振から経済的窮地

⑥ 『矢ごろのかね　小銃彀率』出版の事由：**専門書を翻訳した自負、日本の軍事レベルに危機感から時期尚早にもかかわらず、このタイミングで出版**　⇒　一方で既に上田藩での立身出世を脇に置き、兵学者として名声を得て、然るべきポジションにスカウトを期待か

５．軍事改革への関与と建白書

① 安政６年（1859 年）４月、長崎海軍伝習所の閉鎖により帰府。万延元年遣米使節団（咸臨丸乗船）参加を画策も失敗　⇒　**海軍から陸軍に転身しており、しかも、勝との関係が解消され、松平忠固が失脚していたため、当然の帰結も深甚なショック**

② 万延元年（1860）３月、上田藩に帰藩し養父赤松弘の病没により赤松家を相続（組付御徒士格）⇒　文久元年（1861）１月に組外御徒士格「数学測量世話」、文久２年（1862）７月に詰並「調練調方御用掛」、８月に「西洋流調練稽古仰出」を拝命。赤松の意見具申からオランダ式ライフル銃百挺を購入、上田藩軍事改革に関与　⇒　しかし、なおざりなレベルに強い危機感。文久３年（1862）、藩政改革の意見書を提出　⇒　１石だけの加増に止まった事実からも、藩要路の低い意識を確認

③ 【藩政改革意見書】建白をする意義を岩瀬忠震・勝海舟の言動から学んだ可能性

A) 世上の形勢を明らかに察する事

京都・江戸を始め諸藩の情勢、人気（じんき、民衆の動向・世論）や軍事改革の形勢を十分に探索することは朝廷・幕府の方針を委細知ることになり、上田藩の藩政改革の参考に資することが可能。特に幕府の改革を見通すことによって、節倹や軍制などを幕府に準じて速やかに変革すること可能となり、他藩に遅れることないように人気を引き立てる必要性

B) 御政事向き並びに軍事

> 公辺に准ずる事先づ正直誠忠英才の人二三人御撰抽にて江戸え時々御遣しに相成り、御政事向き並びに御軍制等精敷く御探索成され御胸算の御補助と成され、諸藩に先だち御仁政御施し且つ必勝の御廟算相立て候儀方今の急務と存じ奉り候

幕府に準じるために、藩士から正直で忠義と英才のある人材を２，３人選び、江戸に時々派遣し政治動向や軍制などを精緻に探索して計画立案の参考とし、諸藩に先駆けて藩政改革を断行することが急務

C) 人気励まし方の事

> 上下共兵道を練り候には、第一兵学家を御育成の御策急務と存じ奉り候。方今実用の兵学修業七八人も仰せ付けられ、或ひは鐘美館に入寮、亦追々錬熟に至り候者は出府修業仕り候へば、二ヶ年内には兵制器械等を調へ候人出来仕るべし。右様兵理御調へ相成り候上は先づ兵器御調整は尚更急務緊要に御座候

藩を挙げて軍事改革をするためには、兵学者の育成が急務であり、そのための修行を７，８人に申し付けるか、藩校に入らせ熟練に至り江戸に派遣すれば２年以内に兵制や器械に精通する人物を輩出可能。また、獲得した軍事技術で兵器を製造することも急務

D) 情報の重要性、倹約（逼迫財政の改善）を提言し、幕府に準じ、諸藩に先駆けた藩政改革（富国強兵）のための人材登用を訴え、特に軍事改革への注力を懇請

⇒　**遅々として進まない藩政・軍事改革に強い危機感。一方では、自身の登用を要求**

④ 文久３年、松代藩士 白川久左衛門近克の娘たかと結婚。同年４月、妻の実家を訪ねた際、佐久間象山を訪問。対面は１回のみ、手紙の往復、書物の貸し借りを継続　⇒　翌年、佐久間は京都で暗殺、交

流は僅か１年余り　⇒　佐久間の影響を受けたのかは不分明ながら、佐久間の書簡からは赤松が高く評価されていることが判読可能

６．アプリン大尉との出会いと『英国歩兵練法』

① 元治元年（1864）9 月、幕府は上田藩に第一次長州征伐への出陣を要請。9 月 12 日、小銃・大砲・弾薬の確保のため、急遽江戸行きの命令　⇒　横浜に馬具等を購入するため出向いた際、上田藩士門倉伝次郎の紹介でイギリス公使館付騎馬護衛隊長アプリン大尉と知り合い、江戸・横浜を往復して英語、騎兵操練法・騎兵術を学修　⇒　<u>アプリンとの出会いは軍事戦略家として大成する大きな画期</u>

② 慶応元年（1865）1 月、長州征伐は解兵、一旦帰藩後、直ぐに再出府して横浜との往復を再開し、アプリンに師事　⇒　長州再征に備え、軍備強化が必須のため、藩は再出府を許可か　⇒　2 月 20 日、イギリス兵書翻訳を依頼され、下曽根塾に再入門。『英国歩兵練法』（下曽根金三郎購入）の翻訳開始、加賀藩士 浅津富之助と分担翻訳。出版費用は下曽根、翻訳料が支給　⇒　アプリンからも教示か

③ 将軍進発（長州再征）のため、上田藩も赤松兄弟を含む 1,000 人の藩士が従軍。閏 5 月 15 日、海路大坂着。従軍中も翻訳を継続、原稿を飛脚便で江戸に送付　⇒　慶応２年（1866）3 月、刊行（製本所は江戸日本橋山城屋）

第１編　生兵小隊	慶応元年	始夏（４月）	赤松小三郎訳
第２編　小　　隊	慶応元年	孟秋（７月）	浅津富之助訳
第３編　旋条銃使用法	慶応元年	中秋（８月）	赤松小三郎訳
第４編　大隊運動	慶応元年	仲夏（５月）	浅津富之助訳
第５編　軽　歩　兵	慶応元年	孟冬（10 月）	赤松小三郎訳

④ 日本の陸軍の現状に対する危機感を誰よりも抱き、陸軍を近代化して世界に御するレベルに至急引き上げる必要性を痛感。刊行は軍事戦略家としての名声向上に寄与　⇒　<u>オランダ式ではなく、イギリス式の歩兵練法を初めて翻訳して刊行した事実は極めて重要。イギリス式兵学の嚆矢的存在であり、軍事戦略家としてトップランナーであった証左</u>

⑤ 文久 3 年以降、薩摩藩はイギリスと戦火を交えており、イギリスの軍事に高い関心が集中し、『英国歩兵練法』への高い関心を寄せていたことは疑いなし　⇒　<u>『英国歩兵練法』によって、薩摩藩が赤松に注目を寄せる契機になった可能性は自明の事実</u>

７．幕府宛建白書（慶応２年８月）

① 長州再征の敗北を明言

> 此度征長の御軍備は軍将不巧兵事、列藩不服令、兵器不足、兵勢乏敷、兵法不立諸軍不一和、諸兵之配賦不適当、勝算無之は以是瞭然たり

今回の長州再征の軍備は 軍勢を指揮する者の戦略が稚拙であり、諸藩は命令に従わず、兵器も兵力も乏しく、兵法は成り立たず各軍は不一致で、兵の割り当ても不適当。勝算がないことは一目瞭然

② 政事における人材登用の急務

> 御人選は門地格禄等に少しも無関係破格之御法にて軽輩陪臣にても其身一代は、御老若閣等重き御役に迄も御選抽相成、総て器量に応じて高位高禄に御取立相成、国中智略と位階とに不同無之様、人才御選抽御政事被遊御確定容易に御変動無之儀御国威御振張の根元かと奉存候

人選は家柄や禄高に少しも関係がない特別な方法によって、身分の低い者や家臣の家来でもその身一代に限り老中・若年寄と言った幕閣の重役に人選し、全てが能力に応じて高位高禄に取り立てて、国中で智略と身分に整合性を持たせ、人材を選んで政治を行わせれば、世の中に波乱は起きず、国威振張の源が発生

③ イギリス・アメリカに準じた陸海軍の創生

先御旗下の兵を被成御増加、御軍制は世界中の良法利器御選用相成、就中英亜両国之制は精密実用軽便にして、実に皇国之地理人気に適当仕候へば、此の両国の制に本づき精密美妙の兵法利器御全備に相成夫々学術に応じて司令官並に御以下諸官吏御選抽に相成、左の法にて御旗下の海陸軍実に強勢に御備立こそ方今の御急務と奉存候

まずは幕府直属の兵を増やし、軍制は世界中の優れた戦法・武器を採用し、特にイギリスとアメリカ両国の制度は精緻で実用的で便利であり、実に日本の地理や国民性に適しているので、この両国制度に基づき精密で実用に優れた武器を全て装備し、それぞれの能力に応じた司令官並びに諸官吏を選び、この方法で幕府の陸海軍を早急に強くして備えることが目下の急務

④ 軍制における四民平等の人材抜擢

諸長官は皆旗本にで被命総て軍事総督、其以下諸軍諸隊之長官は、皆門地身分に少しも不拘軽輩陪臣市門農民にても、学術有之者は御選抽相成、国中の諸軍学術と位階とに毫も不同無之様被成置候はゞ、実に諸軍一致之御兵制相立、何時戦争有之候共御指揮次第御軍役相勤候様可相成候

諸長官は全員旗本に命じて軍事総督とし、それ以下の全ての諸軍・諸隊の長官は家柄身分に少しもかかわらず、身分の低い者や家臣の家来、商人や農民でも学識があれば抜擢し、国中の能力と身分の序列にいささかも違いがないようにすれば、諸軍一致の兵制が確立し、いつ戦争になろうとその指揮によって任務を遂行可能

⑤ 幕長戦争における幕府の敗北を明言し、幕政における全国レベルでの人材登用、近代的陸海軍の創設、国民軍への四民平等に基づく参加を提言　⇒　譜代藩家臣でありながら、幕長戦争を実質的に批判し、幕政へのオール武士層の能力主義による登用を促し、条件付きながら国民皆兵を提言する画期的なものであると同時に、極めて幕府に対して不遜な内容に満ちたものであり、上田藩にも害が及びかねない内容　⇒　**軍事戦略家として、幕府主導の身分制を否定する国民皆兵軍の創生、徹底した能力主義と軍隊の西洋化を提言。一方で、自身の幕臣への登用を期待した大胆極まりない建白。上田藩にとっては、能力は認めながらも厄介な存在として認知か**

８．上田藩主松平忠礼宛建白書（慶応２年９月）

① 能力主義の徹底と藩主のリーダーシップ

古例に拘泥仕り候膠桂の御法は尽く御廃し相成り、上下隔絶の儀御廃止、下輩に至る迄言路貫通仕り候様御改正遊ばされ、人才御撰抽の儀は門地格禄に毫も拘泥せず、其の人々の学術智略御撰用相成り候儀緊要に候へば、譬へ下輩にても平日御目見え充分に御咄し申し上げ候様相成り、御直々御人撰これ有り、其の任に適し候者は其の身一代は高位高禄に迄御取立て相成り、惣体学術と位階に少しも不等これ無き様御人撰相成り候へば、上下一和実に富国強兵の基本は他策はこれ有る間敷き儀と存じ奉り候

前例にこだわり、融通が利かない法令はすべて廃止し、身分の上下による藩士の隔たりも廃止し、軽輩の者であっても言路洞開となるよう改め、人材を選任するときには家柄、身分や禄高に一切こだわらず、そ

の人たちの学問や知略から選任することが喫緊の課題であり、例え軽輩の者であっても日頃から面会して十分に話をするようにし、藩主自らが直接人材を選定し、その任に適した者は一代に限り高い役職で高い俸禄で取り立てる。総じて、学問と身分が少しも不釣り合いなく人選ができれば、上級藩士と下級藩士が一体化し、実に富国強兵の基本となり、それ以外の策は皆無である。

② 藩主自らの軍学修学・軍政改革

既に近来私え兵制練兵の儀御頼みにて御出入り仕り候諸侯方は、御幼少にても西洋諸国の兵書御調べ又は洋書御学び、御自身操練の御指揮兵制の御変革等これ有り候御方少からず候

既に近頃、兵制や軍事訓練を（赤松に）頼みに来られた諸侯の方々の中には、年少であっても西洋諸国の兵書を調べ、または洋書を学び、自身が軍事訓練の指揮を執り、兵制改革などを実施している方々は少なくない

③ 若き藩主（17 歳）主導による徹底した早急な藩政改革

古昔大名の御行状にては天朝幕府への御奉公は出来兼ね候時勢に候へば、諸事破格の御変革これ有り、御行状御改め遊ばさるべきの期にて、国家の興廃只御憤発御励志御英断の一端に因り候儀に候へば、何卒御精神御貫徹富国強兵の御政道御施行の程血泣懇願奉り候。此の上方今世上形勢委細の儀、御直々御尋ねに相成り候はゞ万国の法則及び日本列藩の形勢等、委細に申し上げ奉るべく候

昔ながらの大名の行いでは朝幕への奉公はできない御時世になったので、様々な分野で破格の変革が必要である。日常の行為を改める時期であり、国家（藩）の興廃にあたり、ひたすら奮発して志の実現に励み、英断することによって、何卒強い意志を貫き通して富国強兵を実現する政治を行うことを赤心の思いで懇請する。これ以上の現在の世情の形勢は、直接（赤松に）尋ねていただければ、万国の法則や日本中の諸藩の形勢等を詳しく申し上げたい

④ 藩主に対して遠慮がない諫言的建白書。**軍事戦略家として能力主義の徹底を求め、英明な藩主がリーダーシップを遺憾なく発揮しながら、率先して藩政改革の実行を要求**　⇒　下級藩士が上申するには極めて不遜で過激であり、藩要路の警戒を受けるに余りある内容。赤松の危機感や意気込みで片付けられない行動と解釈

⑤ 「既に近来私え兵制練兵の儀御頼みにて御出入り仕り候諸侯」「御直々御尋ねに相成り候はゞ万国の法則及び日本列藩の形勢等、委細に申し上げ奉るべく候」　⇒　現状では藩内で登用される可能性がないと見て、自身を藩主に売り込むために藩主に直言する大胆さ。切羽詰まった現状の打破を目指したとは言え可能性は極めて低く、むしろ逆効果であることを度外視　⇒　**松平忠固が存命で、藩主であった場合、登用する可能性があったか？**

９．幕府仕官の失敗と上田藩との関係

① 幕府仕官を志向し、幕府宛建白書（慶応２年８月）を作成。仮説の域を出ないが、下曽根金三郎に仲介を依頼して幕臣（陸軍所歩兵差図役または講武所砲術教授方）への登用企図　⇒　慶応２年 11 月、幕府は上田藩に開成所教授手伝出役として出向を要請。12 月、藩は銃隊調練指導・軍政改革を命じているとして拒否　⇒　**譜代藩にもかかわらず、拒否した事実は極めて不可解。藩の枠を超えて活躍を期す赤松に対する不信感が存在か。赤松を早期帰藩させる必要性が発生**

② 上田藩との複雑な関係―柔太郎宛書簡（慶応３年３月 10 日）

私身分の儀幕府にては用ひられず、是より会藩にて建て候学校及び大藩の義理に明通仕り候（略）上田にて事を開き日本に弘め候事は出来申すさず。皇国に事を開き候へば、自然上田は開け申し候へば、適当の忠節の心得に御座候。此の節治療の為、滞京の願ひ差出し置き候。当時蟄せられ、又は斬首されぬなれば、小罪は当るとも厭はざる積りに候。去りながら表向きは痔疾旅行出来兼ね候趣に仕置き候間、どこ迄も症気の事に御申し成し下さるべく候

上田藩で事を起こし、それを日本中に知らしめる事は不可能で、日本で事を起こせば自然と上田藩でも事を起こせるはずなので、適切な忠節の心得となる。この節は病気治療のため、滞京願を提出している。今の段階で蟄居させられたり斬首されたりしないのであれば、小罪にはなるもののそれは厭わない積りである。しかし、表向きは痔によって旅行はできないとして、どこまでも病気のためとして欲しい

③ 幕府への士官は叶わず、会津藩の藩校洋学所と薩摩塾を同時に掌ると伝え、上田藩を見限って帰国命令に反して痔疾と仮病を使って滞京。そもそも、上田藩での立身出世は不可能であり、かつ幕府出向を拒否する藩に絶望感。藩を軽視した在京活動を展開　⇒　<u>上田藩を見限り、軍事戦略家として会津藩や薩摩藩等の大藩に依拠した活動を重視</u>

③ 上田藩への怨嗟―柔太郎宛書簡（慶応 3 年 7 月 16 日）

幕府の方段々陸軍方え周旋も仕り候え共、一旦明白に断り候書出で候へば何分相談出来兼ね申すべき趣、先づ六七分は出来難く全く藩より斯の如き所置と申すはこれ有る間敷き趣意の由

幕府士官を諦めきれず、陸軍方へ周旋もしたが、一旦明白に上田藩は断っているため何とも相談もでき兼ねるとのことで、まずは6，7割は難しく、上田藩が拒否するなどあるまじき行為であると言われている

⇒　<u>上田藩に対する怨嗟とも言える恨み節。軍事戦略家としての登用を断念</u>

④ 上田藩周旋方就任への期待

A）柔太郎宛書簡（慶応 3 年 8 月 17 日）

戦法活用は外に訳書これ有り候間、写させ差上げ申すべく候。桜井氏（桜井純造、上田藩士）え申し遣し候通り、右書器等求め方仰せ付けられ候はゞ、随分込め等の良銃もこれ有り、書物は猶更これ有り、<u>全く諸藩周旋方の任は外藩の改正を聞き、書類・器械の良否を弁じ候等而已にて、実に御国事に尽力し候人は絶えてこれ無く候。此の辺御尽力少しも善に趣き候御策急務かと存じ奉り候</u>。万事宣しき様御尽力願ひ奉り候

B）柔太郎宛書簡（慶応 3 年 8 月 20 日）

明二十一日帝鑑間留守居周旋方残らず会合これ有り候て同盟にて天下の御為用に立ち候様致すべく談合の由、已に先日御普代尾紀其の外の周旋方会合これ有り候へ共、細論に至り兼ね候へば御同席斗り会合の儀に御座候。赤座氏にては何の論も出来申す間敷く、<u>周旋方これ無く候ては報国の道は立ち申す間敷く、其の辺大夫え御上言これ有り度く存じ奉り候</u>。少しは興国の小補にも成り候へば幸ひに御座候

A 下線部：諸藩の周旋方の任務は他藩の改革状況を探り、文物・武器の良し悪しを吟味するのみであり、実際に国事に尽力する人材は絶えてしまった。このあたり、尽力して少しでも良い方向に持って行く策略を施すことは急務である

B 下線部：周旋方を設置しなければ、国に尽くす道は確立できず、このあたりを家老に言上していただきたい

⇒　<u>兄に対し、自身の周旋方推挙を依頼。藩内外での軍事戦略家としての登用は難しいため、藩に留まりながら周旋方に就いて、在京資格を獲得するとともに、他藩士と共に国事周旋を実行できる環境作り</u>

<u>に方向転換</u>

１０．　家塾・薩摩塾の誕生と「重訂英国歩兵練法」

① 家塾（天雲塾との呼称あり）の開設時期には諸説あり。兄柔太郎宛書簡（慶応２年 10 月 26 日）は断片しか現存しないが、そこは記載がなく、肥後藩から英式兵学、会津藩から蘭書翻訳依頼の記載あり ⇒　越前藩周旋方酒井十之丞書簡（慶応２年 11 月 16 日、毛受鹿之助宛）には、「赤松小三郎兵学功労者之由に付、今度五六輩同人に相手寄為修行被差出候筈に付、青山小三郎にも別紙之通被仰付候聞申渡候則今朝申渡候事に候」とあり、この段階での存在を確認　⇒　柔太郎宛書簡（慶応３年３月 10 日）には、「小生塾、薩摩四人、肥後三人、大垣三人、学僕一人、歩兵騎兵取調べ申し候」とあり、塾の存続を確認　⇒　<u>家塾を許可した上田藩には登用の意思なし。運営しながら、幕府や大藩への軍事戦略家として仕官を模索</u>

② 下曽根塾の後輩に当たる薩摩藩士野津道貫の推薦によって、薩摩塾を開設。その時期は上記３月 10 日柔太郎宛書簡に記載がないことから、それ以降の早い時期か。大垣藩士可児春琳の略歴には３月入塾とあり、これ以降の月内の可能性大　⇒　家塾を薩摩藩邸内に移設、薩摩藩士を優先して英国式兵学修得させる目的

③ 薩摩塾は他藩の希望者も入塾可能、薩摩藩士約 50 名のほか越前藩士、大垣藩士等が入塾。授業科目は英国式兵学（歩兵、騎兵、射撃）、西洋戦史、航海術、算術等、英語等　⇒　塾生には野津道貫（初代塾頭）、野津鎮雄（2 代目塾頭）、桐野利秋、村田新八、篠原国幹、東郷平八郎、伊地知正治、樺山資紀、上村 彦之丞等。明治時代の海軍・陸軍のリーダーに成長

④ 慶応３年（1867）５月、「英国歩兵練法」（1864 年増補改訂版）の原書を翻訳した「重訂英国歩兵練法」（薩摩版）を刊行。全７編９冊、表紙の色から「赤本」と呼称　⇒　最終巻第７編の奥付に「薩摩軍局」と朱印。薩摩藩の自信の表れと統制の意思表示

⑤ 薩摩藩がどのタイミングで依頼をしたか不分明。酒井十之丞書簡（慶応２年 11 月 16 日、毛受鹿之助宛）には、「赤松は何程の者に候や元来薩より差留置候もの故、今朝青山小三郎を遣し篤と探索を為致候事」と記載　⇒　「差留置」の解釈が難解だが、「重訂英国歩兵練法」翻訳のための措置か　⇒　刊行は島津久光の上京に合わせた可能性。<u>久光から「新製 16 響ヘンリー騎兵銃」を拝領した事実は、薩摩藩と赤松の蜜月状態を端的に表しており、薩摩藩への仕官の可能性も否定できず</u>

１１．　幕府・越前藩・薩摩藩への「建白七策」

① 四侯会議開催に合わせ、慶応３年５月に幕府（徳川慶喜）・薩摩藩（島津久光）・越前藩（松平春嶽、５月 17 日）に提出　⇒　土佐藩（山内容堂）・宇和島藩（伊達宗城）への提出はなし。赤松自身に伝手がなかったというよりも、伝播する前提で必要性を感じていなかった可能性大

② 幕長戦争での幕府・譜代連合の敗退（＋上田藩の無関心への嫌気）を機に、幕府主体の身分制解体を前提とする国民皆兵の欧米的近代軍隊の創世に見切りを付け、この段階から幕府と西国雄藩、特に薩摩藩との融和による実現に方向転換　⇒　<u>譜代小藩の上田藩士であるため幕府を排除できず、幕府と西国雄藩の連携、特に幕薩融和を意識した行動を開始</u>

③ 内容は多少の異同があるにしても、基本同一と見なせるもので、直筆が残存する薩摩藩宛をベースに検討することが肝要（越前藩宛について、『続再夢紀事』は誤植の可能性があり、薩摩藩側の『忠義公史料』4（史料番号 426）の「雇教師赤松小三郎＜松平慶永宛＞」の使用がベター）　⇒　幕府宛建白は 11 月に盛岡藩が幕府宛建白書の写しを入手、「贈従一位池田慶徳公御伝記」（慶応 3 年 9 月 17 日条）に「上田藩赤松小三郎、出邸前に隅州侯（島津久光侯）へ差し出し候建白書を手に入れ」の記載あり　⇒　**範囲は不分明ながら、相当広範囲に流布していた可能性大**

④ 内容の吟味、その他の構想との比較については諸書に譲るが、『西洋事情』を参考に日本にカスタマイズしたものであり、大同小異ながら同様な構想はある程度共有　⇒　内容そのものの先見性もさることながら、**こうした構想を初めて明文化したことが極めて重要であり、かつ、このタイミングで建白した政治的センスに重きを置くべき事象**

【建白七策の要点】

1. 天幕御合体諸藩一和
朝廷と幕府とが合体し、諸藩も一体化する国体を確立する根本は、朝廷の権限を強化し徳を備えること。天皇を補佐する宰相（大臣）を将軍・公卿・諸侯・旗本から 6 人選び、大閣老（大統領）は国政全般、その他宰相は財政、外交、陸海軍の軍事、司法、徴税を分掌し、官吏を人選家柄になく人選。 上下二局の議政局（官吏人事権保有）を設置、普通選挙によって議員を選出し、朝廷の反対があっても議政局決議を優先
2. 人材教育
人材教育を国是とし、江戸・京都・大坂や開港地に大小学校を建設、外国人教員の雇用など、学校教育の確立を提言
3. 人民平等
個人尊重、職業選択の自由、納税の義務
4. 通貨政策
通貨制度を改めて、欧米モデルの世界に通用する通貨の鋳造
5. 陸海軍整備
少数精鋭の専守防衛的軍隊の創設
6. 殖産興業
お雇い外国人による各種産業の振興、兵器を始めとする国産化の推進、安価な製品の量産
7. 畜産業振興と肉食奨励
西洋的な畜産業の振興と肉食への移行による富国強兵

１２．　会津藩との関係と「幕薩一和」

① 慶応 2 年（1866）11 月、会津藩が赤松の英国式兵学に興味を示し、銃隊調練稽古を依頼　⇒　「私身分の儀幕府にては用ひられず、是より会藩にて建て候学校及び大藩の義理に明通仕り候」（柔太郎宛書簡、慶応 3 年 3 月 10 日）。会津藩士山本覚馬の依頼を受け、会津藩が設置した洋学所顧問に就任（同時に西周も）、併せて調練も実施

② 会津藩による引き留め工作ー柔太郎宛書簡（慶応 3 年 7 月 16 日）

会藩にて頻に止め候て今諸藩の間に入り一和を謀り候人を用も無きに国へ帰し候ては相成らずと申し候て、幕府へも此の節周旋いたし又赤座（上田藩京都留守居役）を説き上田へも公用人より説得書差出し候筈に御座候。幕府えは藩より此の節当人用向き手透にも相成り候間、御遣ひ下され候様書面を出し候へば、上の御首尾も余程取戻し愚評も脱し候趣、陸軍奉行咄に御座候。此の外には急に出で候策はこれ無きかの様子、右の辺師岡大夫（家老）辺え御相談下され候て成否御申し越し下され候様仕

り度く、会藩にては幕にて用ひず候はゞ上田君公（藩主）よりの御沙汰にて滞京命ぜられ候様に上田へ申し越し候趣に御座候。又願書の儀今に御沙汰これ無く候。厳命に候はゞ様子次第戻り候心組にもいたし候処、今に御沙汰無く候へば幸と存じ消光仕り候儀に御座候。何れにも今少し先に成り候はゞ猶更国家の小補いたし候策も行はれ候見込みに御座候

【要点】会津藩は赤松の在京を求め、幕府や京都留守居役に帰藩阻止を要請し、上田藩地にも書面で説得。兄にも在藩家老への周旋を依頼する。会津藩は幕府が登用しない場合、上田藩主から滞京を命じてもらえるように要請する。藩から厳命があれば、場合によっては帰藩するつもりであるが、今のところなく、いずれにしろ、もう少し先になれば更に国家のために多少の貢献は可能である　⇒　会津藩から幕府・上田藩に積極的で執拗な滞京運動が展開。赤松自身も在京のまま、国事周旋の継続を期待

③ 会津藩の真意について、「京阪御用状往復留」（上田藩庁文書、6 月 29 日付上田藩留守居代赤座寿兵衛書簡、岡部九郎兵衛他宛）によると、会津藩（公用人 外嶋機兵衛）から赤座および留守居役山田貫兵衛に対し、引き続きの軍事調練の担当を依頼　⇒　**更に、薩摩藩にも軍事調練等を担当しているので、近頃諸藩と付き合いを控え、その動向が把握できずに底意が分からない薩摩藩の動向探索を依頼。それが徳川家及び上田藩の利益となると主張**

④ 上田藩・赤座の反応

薩藩立入り候辺は、究竟の儀に付き(略)当人心得方虚実は差置かれ、会津様より御頼み御相談の廉を以て、小三郎儀当分其の侭差置き候様の儀は、如何に御座候哉(略)万一薩藩等へ相漏れ候はゞ御不都合にも御座有べき哉、当人へは、会津様より懸合いに付き、御拠無く当分其の侭差置かれ候と計り口達位にて、会津様公用人へ小三郎身分当分御預けの姿に、極内々私辺より相頼み候位にては、如何に御座候哉(略)身分に預からざる儀を尽力致し候辺、恐れ入り候事に御座候へ共、是も当今形勢故、夫等の辺差置き

薩摩藩と接点があることは、都合が良い。当人の心得の真偽はさておき、会津藩公用人よりの話であるので、会津藩の意向に沿ってしばらくの間はそのまま滞京させてよいのではないか。万が一、薩摩藩等に漏れてしまうと不都合なので、赤松本人には会津藩からの要請につき、仕方なく当分は滞京させる程度に口頭で伝え、会津藩公用人に赤松を当分預ける格好にできるよう、極内密に依頼したらいかがか。赤松は身分不相応なことに尽力しており、不都合なことではあるものの、これも今の形勢から仕方なく放置している　⇒　**上田藩在京要路は会津藩の要請を受け入れ、赤松滞京を認めることを国元重役に打診。赤松の周旋活動を苦々しく感じていながらも、譜代藩として会津藩への協力を画策**

⑤ 幕薩融和の周旋実態

A）柔太郎宛書簡（慶応 3 年 8 月 17 日）

此の節小生は幕薩一和の端を開き候事に懸り、薩西郷吉之助え談合し、幕の方は会藩公用人にて談じ始め居り申し候。小生は梅沢孫太郎（幕府目付）、永井玄蕃公（尚志、若年寄格）え説く。少しは成り申すべき見込みに候

B）「時勢の儀に付拙見申上候書付」（『山本覚馬』）https://dl.ndl.go.jp/pid/1058251/1/144

昨卯年六月、私儀、赤松小三郎を以て御藩（薩摩藩）小松氏西郷氏え其段申述候処、御同意に付、幕府監察えも申談候得共、更に取合不申、猶夫是奔走周旋罷有候

A　「幕薩一和」の端緒を開こうと考え、薩摩藩側では西郷隆盛に掛け合い、幕府側では会津藩公用人（山本覚馬）と論じ始めた。また、梅沢孫太郎や永井尚志にも「幕薩一和」を説いており、少しは成功の見込みが出てきている

Ｂ　慶応３年６月、（山本は）赤松を頼って薩摩藩の小松帯刀・西郷と面談して「幕薩一和」を申し述べたところ、同意ということなので、幕府の目付（梅沢・永井）にも掛け合ったけれども、取り合ってもらえなかったが、その後も奔走を続けた

⇒　「幕薩一和」実現のため、会津藩士山本覚馬と連携。西郷と談判したり、山本の意見を小松・西郷に開陳したり、または両者を引き合わせ、薩摩藩の同意を獲得し、幕府の梅沢・永井にも働きかけ、成功するかに見えたが首尾良くならず、継続して周旋をしたことは余り知られていない事実　⇒　**「幕薩一和」運動は、幕末政治における画期的な事象。形を変えて、大政奉還運動に連動し、大政奉還後の小松帯刀や坂本龍馬による政体構想に接続。幕末政治史における位置づける必要がある事象**

１３．　赤松暗殺の実相

① 上田藩による帰藩厳命により、一旦帰藩する決心。薩摩藩にスパイと見なされ、慶応３年９月３日 16 時頃、京都東洞院通で薩摩藩士桐野利秋（中村半次郎）、田代五郎左衛門によって暗殺

② 桐野は探索を任務としており、赤松の挙動を監視してスパイと断定。確かに、会津藩から上田藩に赤松をして探索させる依頼をしているものの、実行したかどうかは不分明　⇒　**「幕薩一和」周旋を続ける赤松が、必要に応じて薩摩藩の情報を開陳していることは想像に難くなく、このあたりが嫌疑を受けた事由か。赤松が上田藩士であったための悲劇**

③ 桐野は単独で動ける権限を有していたと考えられるが、事前に西郷に告知していた可能性あり。なお、最低限、桐野は事後報告していたはずであり、薩摩藩（少なくとも要路）はその事実を共有か

赤松小三郎暗殺セラル（『忠義公史料』4，史料番号 513）
赤松何某トテ、本信州浪人ニテ、砲術ニ達セシモノニテ、此方ヨリ段々門人モ多ク、有名ノモノニ候処、是ハ幕府ヨリ間者之聞ヘ有之、中将公御出立前夜打果候ヨシ（『鹿児島県史料　忠義公史料』四）

１４．　幕末政治と赤松小三郎

① 赤松小三郎の評価を、「建白七策」の先見的な内容からアプローチし過ぎることを避け、政治（変革）家としての立場を過度に強調することを控え、まずは英式兵学を我が国に最初にもたらした軍事戦略家の側面を高く評価すべきであり、軍事史学における赤松の再評価を期待する。

② 「建白七策」について、譜代小藩の上田藩士であるため幕府を排除できず、幕府と西国雄藩の連携、特に幕薩融和を意識し四侯会議に合わせて建白をしており、こうした構想を日本で初めて明文化したことが極めて重要であり、このタイミングで建白した政治的センスに重きを置くべき事象と位置づける。

③ 「幕薩一和」運動について、幕末政治における画期的な事象であり、実は形を変えて、大政奉還運動に連動し、更には大政奉還後の小松帯刀や坂本龍馬による政体構想に接続したと考える。この周旋活動は、幕末政治史における極めて重要なものと判断する。

④ 赤松小三郎の非業の死は、日本軍事史において痛恨事であるとともに、政治史においても有能なインストラクチャーを喪失したと断言しても、過大評価にはならないと確信する。

【参考】『京在日記　桐野利秋』

同月３日　晴
一、小野清右エ門・田代五郎左エ門・中島建彦・片岡矢之助、僕より同行、東山辺散歩、夫より四条ヲ烏丸通迄帰り掛候処、幕逆賊信州上田藩赤松小三郎、此者 洋学ヲ得候者ニて、去春より御屋敷へ御頼に相成り、今出川、烏丸通西へ入町へ旅宿致し、諸生も肥後・大垣・会津・壬生浪士・内より壱人居弟子、其外ニも諸 藩より入込も多し、然処、此度帰国之暇申出候ニ付、段々探索方ニ及候処、弥幕奸之由分明にて、尤当春も新将軍へ拝謁等も致し、此此も同断之由、慥ニ相分
折柄今日東銅院四条通西へ入町ニて出合候ニ 付、不可捨置之者ニて、夫より小野・中島・片岡の三士は、烏丸四条南角ニまんぢう屋在り、此の処ニ為待置、田代と僕右赤松の跡ヲ追ひ附候処、四条より東銅 院ヲ伏見之様下り候ニ付、追ひ候処、仏光寺通ニて屋敷者野津七次外ニ弐人在、赤松と相角致し、おひ手を通り、我々は五条下る迄越し、跡へ引返し候処、魚棚 上ル所ニて出合、我前に立ちふさかい、刀を抜候処、短筒に手ヲ掛候得共、左のかたより右のはらへ打通候処、直ニたおるる所ヲ、田代士後よりはろふ、壱余り 歩ミたおる也、直ニ留ヲ打ツ、合て弐ツ刀、田代も合て弐ツ刀にておわる。打果置者也、夫より直ニ引返し、右の三士の居る処まで来る、五士同行ニて帰邸営也

【参考】「斬奸状」（京都三条大橋南側擬宝珠）

元信州上田藩　赤松小三郎

此の者之儀、兼て西洋ヲ旨トシ　皇国之趣意ヲ失ヒ、却テ公ヲ動揺せしめ候儀、不届き之至り捨置くべからざる之多罪ニ付き、今日東銅院五条下ル処ニテ天誅ヲ加ふるニ附き、則ち其の首ヲ取り肆（さら）すべき之処に候え共、昼中ニ附き附き其の儀ヲ能はず、依って此の如く也。

卯九月三日七ツ時　　有志中

右張紙ニ附其の処承り合せ候処、東銅院通り魚棚下ル町ニて昨三日夕七ツ時、西洋風俗帯刀人日傘ヲ持ち供ヲ召連れ都合二人通行致し候処、何方よりか跡ヲ附け候哉、矢庭ニ切倒シ其の侭立去り申し候。供之者モ同時ニ逃去り候。右赤松幕府御家人之由

赤松小三郎略年譜

（赤松小三郎研究会）

元号	西暦	年齢	赤松小三郎の事績	日本の動き
天保２	１８３１	１	４月、信州上田藩士芦田勘兵衛の次男として誕生。（幼名清次郎　兄は柔太郎）	
天保８	１８３７	７	幼少より、叔母の夫植村重遠に算数を学ぶ。	
天保１３	１８４２	１２		（８月、アヘン戦争で清国惨敗）
天保１４	１８４３	１３	藩校に入学し、漢籍と武技を学ぶ。	
嘉永元	１８４８	１８	江戸に出て、数学者内田弥太郎のマテマテカ塾に入り、算数、天文、測量、暦学、地理、蘭学等を学ぶ。	
嘉永２	１８４９	１９		１０月、上田藩主松平忠優、老中に就任。
嘉永５	１８５２	２２	西洋兵学者の下曽根信敦塾に入り、蘭学、砲術等を学ぶ。	
嘉永６	１８５３	２３		６月、米国ペリー艦隊浦賀に来航
嘉永７	１８５４	２４	春、上田藩士赤松弘の養子となる。 夏、勝海舟に入門する。	３月、日米和親条約締結。
安政２	１８５５	２５	１０月、勝海舟の内侍（従者）として、長崎海軍伝習所に入所し、蘭学、兵学、航海術等を学ぶ（安政６年４月頃まで）。	８月、松平忠優、老中を罷免される。
安政４	１８５７	２７	７月、オランダの兵書「新銃射放論」を翻訳。	９月、松平忠固（忠優を改名）、老中に再任される。
安政５	１８５８	２８	オランダの兵書「矢ごろのかね　小銃彀率」を翻訳・出版。	４月、井伊直弼、大老就任。 ６月、日米修好通商条約調印 ６月、松平忠固、老中を罷免される。 ９月、安政の大獄始まる。
安政６	１８５９	２９	４月、長崎海軍伝習所の廃止に伴い、長崎から江戸に帰る。	９月、松平忠固死去。

万延元	１８６０	３０	咸臨丸に乗船を希望するもかなわず。 ３月、養父赤松弘没し、赤松家を継ぐ。	１月、咸臨丸、浦賀出発。 ３月、桜田門外の変。
文久元	１８６１	３１	１０月、小三郎に改名する。	
文久２	１８６２	３２	７月、上田藩で、調練調方御用掛を命じられる。	１月、坂下門外の変。 ８月、生麦事件。
文久３	１８６３	３３	春、松代藩士の娘、たかと結婚する。 ４月、佐久間象山と松代で初めて会談、以後、象山と交流する。 上田藩に藩政改革意見書を提出する。	５月、長州藩、下関で外国船を砲撃。 ７月、薩英戦争。 ８月１８日の政変。
元治元	１８６４	３４	７月、佐久間象山、京都で暗殺される。 １１月、江戸から横浜のイギリス公使館付武官アプリン大尉等を訪ね、英語やイギリス兵学等を学ぶ（元治２年３月まで）。	７月、蛤御門の変。 ８月、４国連合艦隊下関砲撃。 ７月～１２月第一次長州征討。
慶応元	１８６５	３５	２月、下曽根信敦塾に再入門する。 ４月、「１８６２年施條銃式英国歩兵練法」の翻訳を始める。	
慶応２	１８６６	３６	３月、下曽根稽古場蔵版として、「１８６２年施條銃式英国歩兵練法」（５編８冊）を出版する（浅津富之助と共訳）。 ８月、幕府へ、長州征討を批判し、有能な人材の登用、兵制の改革刷新等を求める建白書を提出する。 ９月、上田藩主へ、人材の登用、言論の自由、藩主自身の取るべき姿勢等について建白書を提出する。 １０月、京都で、江戸へ出立直前の、勝海舟を訪ねる。京都衣棚で兵法塾を開き、英国式兵法教授などを行う。後、薩摩藩邸に招かれて、兵法教授、調練等を行い、会津藩でも調練等を行う。 １１月、幕府、上田藩に、小三郎の開成所教官兼海陸軍兵書取調役採用を打診する。 １２月、上田藩、幕府の小三郎採用を断わる。	１月、薩長盟約。 ６月～８月、第二次長州征討。 ７月、将軍家茂急死。 福沢諭吉、「西洋事情」を出版。 １２月、徳川慶喜、将軍就任。 １２月、孝明天皇急死。

慶応３	１８６７	３７	５月、薩摩藩からの依頼により「薩摩蔵版重訂英国歩兵練法」（７編９冊）を刊行する。 ５月～　幕府、越前藩松平春嶽（前幕府政事総裁職）、薩摩藩島津久光等に議会政治等を提唱する建白書（「建白七策」）を提出する。 ８月頃、幕府と薩摩藩の間を取り持つ（幕薩一和）ため、西郷隆盛、若年寄永井尚志らと談合する。 ８月末、上田藩の命により、いったん帰藩する決意をする。 ９月３日、京都５条東洞院魚棚下ルにおいて、薩摩藩士中村半次郎（桐野利秋）らによって暗殺される。	１月、明治天皇践祚。 ５月、四侯会議。 ６月、薩土盟約締結。 ８月、薩摩藩武力討幕派、長州との挙兵計画を策定。 ９月、薩摩藩、土佐藩との盟約を破棄。
（参考）				
明治３９	１９０６		５月、小三郎の弟子であった東郷平八郎大将と上村彦之丞中将は、伊東祐亨元帥とともに上田を訪問し、小三郎の霊位に弔祭料を供えた。	
大正１３	１９２４		従五位を追贈された。	

「赤松小三郎研究会」入会のご案内

２０２３年１１月２６日
赤松小三郎研究会
（上田高校関東同窓会）

当研究会は、赤松小三郎や幕末史に関心をお持ちの多くの皆さまのご入会を心からお待ちしております。上田高校同窓生の皆さまに限らず、どなたでも入会大歓迎です。次ページの入会申込書をご利用ください。

（幕末の上田藩士、赤松小三郎）

幕末の上田藩士、赤松小三郎は、京都の薩摩藩邸や会津藩邸などで西洋兵学などを教え、東郷平八郎はじめ多くの英才を育てました。また、他の誰よりも早く、議会制度の創設などわが国近代化に向けてのグランドデザイン（憲法構想）「建白七策」を起草し、前政事総裁職の松平春嶽、薩摩藩国父の島津久光など政局のキーマンにその実現を働きかけるなど、わが国の近代化のために全力を尽くしました。しかし、慶応３年（１８６７年）９月３日、３７歳で、弟子の中村半次郎（桐野利秋）など薩摩藩士によって暗殺されました。

赤松小三郎の先進的な政治思想と優れた洋学の教えは、日本の近代化に大きな役割を果たしましたが、志半ばで暗殺されたこともあり、これまで、小三郎の事績について、十分な歴史的評価が行われてきたとは言い難い状況にあります。

（研究会の設立目的とこれまでの活動概要）

赤松小三郎研究会は、赤松小三郎の事績を明らかにし、歴史的な再評価を実現するとともに、広く幕末史への理解を深めることなどを目的として、２０１３年８月、上田高校関東同窓会の同好会として設立され、今年、設立１０周年を迎えました。

この間、多くの皆さまのご支援をいただきながら、９回の講演会を含め、５０回を超える会合を重ねることができ、多くの成果を挙げることができました。

（研究会例会の活動内容）

当研究会の例会は、現在、偶数月の第２土曜日、午後２時から２～３時間程度開催されており（会費は実費５００円程度）、毎回、２０名程度が出席しています。

例会では、研究会会員や有識者から、赤松小三郎や幕末史などに関するさまざまなテーマについて、調査・研究の成果が発表され、この発表を基に活発な意

見交換を行っています。これらの活動の概要は、毎回、上田高校関東同窓会ホームページ（「会の活動・同好会活動」）において、公開しております。

http://uedakant.sakura.ne.jp/

また、赤松小三郎研究会では、これらの活動と合わせて、佐野鼎研究会、幕末史研究会、万延元年遣米使節子孫の会、勝海舟の会など他の研究会などとの交流も活発に行っております。

（入会のお誘い）

赤松小三郎研究会では、活動の充実・強化のため、赤松小三郎はじめ幕末史に関心をお持ちの皆さまに、当研究会に是非ともご入会いただきたいと念願しております。

なお、この研究会には、上田高校同窓生に限らず、赤松小三郎や幕末史に関心をお持ちの方であれば、どなたでも入会を大歓迎いたします。

（入会のお申込み・お問い合わせ）

当研究会への入会をご希望の方は、下記入会申込書に、入会金１０００円を添えて、お申し込みくださいますよう、お願い申し上げます。

また、入会や活動状況等についてのお問い合わせは、下記あてお願い申し上げます。

赤松小三郎研究会：Ｅメール：oosakajou@msn.com

（切り取ってご提出ください。）

赤松小三郎研究会入会申込書

入会金1000円を添えて、次のとおり入会を申し込みます。

2023年　月　日

お名前　：　（上田高校同窓生の場合　期）

お電話番号　：

メールアドレス　：

ご住所　：

（お預かりした個人情報は、厳正に取り扱い、目的外使用はいたしません。）

「赤松小三郎研究会」最近の活動概要

（２０２２年１２月１０日～２０２３年１０月１４日）

＊　各回の詳しい内容は、上田高校関東同窓会ホームページの赤松小三郎研究会のページをご参照ください。http://uedakant.sakura.ne.jp/

第４４回赤松小三郎研究会

日時：２０２３年１０月１４日（土）午後２時～４時３０分

○　「赤松小三郎研究会設立１０周年記念第１回幕末史特別講演」

・　講師：万延元年遣米使使節子孫の会代表理事
　　宮原　万里子様

・　演題：「開国後初の公式外交使節団・万延元年遣米使節世界一周の旅」

・　概要：　講師は、万延元年遣米使節副使村垣淡路守の玄孫であり、豊富な史料等を基に、スライドを駆使して、遣米使節の歴史的意義と全行程が説明された。

　スライドでは、使節団が派遣されるに至った背景（江戸幕府による開国後初の公式外交として派遣）、使節団の構成（総勢７７名）等についての紹介の後、三使節の任命、ポーハタン号への乗船、ハワイへの寄港（王カメハメハ４世への謁見）、サンフランシスコ到着、パナマ地峡横断、ホワイトハウス訪問、ブキャナン大統領謁見、ニューヨークでの歓迎パレード、ナイアガラ号への乗船、香港等を経て江戸帰着などの行程について説明が行われ、徳川家茂から大統領あて国書、使節からの贈り物、批准書、使節団員へ贈られた銀、メダルなどのスライドも披露された。

　まとめとして、万延元年遣米使節の功績として、見聞を広めたこと、貨幣制度に関する寄与、近代国防組織への開眼、科学知識の導入、英学の発達が挙げられ、この使節団が、米国にとっても費用をすべて支払うほどの国賓待遇で大歓迎した外国使節団であったことが述べられた。

　万延元年遣米使節子孫の会は、２０１１年に設立（２０１６年一般社団法人化）され、史実と遣米使節の意義を正しく伝えることなどを目的としており、２０２０年には万延元年遣米使節記念碑に英語訳説明板を設置して、東京都へ寄贈するなどの活動を続けている。

○　「幕末期　公議輿論の起点」

・　報告者：岡田　渉様

・　概要　：赤松の口上書は、「言路洞開」と海防論（パワーポリティクス）を背景として論じられるべきとして、３つの論点が提起された。

　論点１は、公議輿論・「言路洞開」の起点をどこに求めるかで、「黒船説」と

「アヘン戦争教訓説」がある。

論点２は、赤松の国家構造改革企画書にある、＜こころの叫び＞視線を思想的観点でどう深掘りするか。

論点３は、赤松の議会構想で特筆すべき、「～もし天朝が反対の場合は再決議すれば、～直ちに国中に布告すべけし」の発想の原点を探ることである。

○　「赤松小三郎研究会設立１０周年記念事業等の進捗状況」

・　進行：滝澤　進会長

・　概要　：設立１０周年記念事業等の進捗状況について、説明が行われた。

○　「役員の変更について」

次の役員変更が承認された。

・　副会長　　沓掛　忠

・　副事務局長　荻原　貴

・　運営委員　　芦田雄樹

第４３回赤松小三郎研究会

日時：２０２３年6月１０日（土）午後１時３０分～５時

○　「防長回天史（長州藩の史料）―薩土同盟書と小三郎の建白書―」

・　報告者：石川　浩様

・　概要　：「防長回天史」（政治家・歴史家の末松謙澄（かねすみ）が、明治３０年～３２年にかけて編纂した幕末・明治維新期の長州藩史で、明治４４年から大正９年にかけて全１２巻刊行）に、「公議政体の論は必ずしも土佐人の新案にはあらず、５月１７日信州上田藩士赤松小三郎がこれに関する意見を越前藩に提出した。」とある。

この記述を読み解くと、薩土同盟書は、小三郎の建白書を参考にして作られたとも解釈できる。

第４２回の鳥取藩における史料「贈従一位池田慶徳公御伝記」の「容堂侯建白書は、小三郎の建白書と似ている」との記述と今回の「防長回天史」の記述から、当時、各藩で小三郎の建白書が話題になっていたことが確認できた。

○　「赤松小三郎と浜田彦蔵」

・　報告者：滝澤　進様

・　概要　：赤松小三郎とほぼ同世代の浜田彦蔵は、「漂流者」や「新聞の父」として知られているが、「漂流記」においてアメリカの政治事情を紹介するとともに、慶応元年（１８６５年）、わが国初の憲法草案とされる「国体」を幕府外国奉行に提出している（「返戻」になったとされる。）。

「国体」は、比較的最近まで存在そのものも含め、広く知られることはなかったが、アメリカ合衆国憲法の特色を参考としたものであり、徳川家中心の体制の

維持を前提としたものではあるが、近代憲法に不可欠と言われる個人の人権規定を詳細に盛り込むなど、わが国初の憲法草案と評価される。

「国体」を「建白七策」と比較すると、「建白七策」が、政体構想を含む幅広い分野を対象としているのに対し、「国体」は、政体構想と人権規定を中心としたものであり、対象範囲が大きく異なっている。

また、「建白七策」が「天幕御合体・諸藩一和」によって平和的な体制移行を企図しているのに対し、「国体」は徳川家中心の体制の維持を前提とするものであって、現実の政治的解決策としては、無理があったものと考えられる。

○　「赤松小三郎研究会１０周年記念事業等について」

・進行：滝澤　進会長

・概要：赤松小三郎研究会１０周年記念事業の進捗状況について説明が行われた。

第４２回赤松小三郎研究会

日時：２０２３年４月８日（土）午後１時３０分～５時

○　「信州の生んだ幕末の先覚者、赤松小三郎の刀について」

・　報告者：沓掛忠氏

・　概要　：昭和２９年９月２１日の「郷友信濃」で、昭和２８年９月２１日、小三郎の佩刀が上田市役所の倉庫内で発見されたとの記事が掲載されたことについて、次のような報告が行われた。

・　小三郎の佩刀が昭和２８年になって発見された理由について

昭和２０年（１９４５年）１０月２３日、連合軍による民間の「武器の引き渡しの命令」 により、所有している刀剣等（刀、脇　差、槍など）は最寄りの警察署へ提出するよう命令されたが、上田市役所（又は博物館）関係者が、赤松小三郎の刀が没収・損壊されることを惜しんで、密かに倉庫内に隠し、昭和２８年になって、隠していた事実を公にしたのではないか。

・　小三郎の「刀」について

・　作刀者は舞鶴友英（友秀）と推定される。舞鶴友英は大阪狭山藩のお抱え刀工で、四谷に刀工場を開いていた。赤松の師の内田弥太郎の塾が四谷忍町近辺にあったことから、内田と舞鶴は顔見知りで、内田が舞鶴に 赤松の刀の作刀の口利きをした可能性がある。

・　刀の根元に「殺活応機」の四文字の銘が刻まれている。この意味ははっきりしないが、「事に臨んでは、自分にチャンスが訪れたときは思い切って自分の信ずるままに進め（又は自分の思うままにできる）」との意味と推測する。

○　「『鳥取藩慶應丁卯（ていぼう）筆記』を調査してわかったこと。」

・　発表者：　石川　浩氏

・　概要：　「鳥取藩慶應丁卯筆記」の「贈従一位池田慶徳公御伝記」慶應3年9月17日の条に、「上田藩赤松小三郎、出邸前隅州侯（島津久光侯）へ差出候建白書手ニ入候に付」とあり、小三郎の建白書が紹介されている。

　また、慶應3年10月3日の条には、「容堂侯より御建白書提出」とあり、その内容について、「過日之赤松小三郎の建白書ニ相似たる処も有之事」との記述がある。小三郎の建白書と容堂侯の建白書がよく似ているということは、小三郎の建白書が 大政奉還に参考にされていたという大きな証拠である。

○　「赤松小三郎は、松平春嶽に、建白書を直接手渡したか 」

・　発表者：　石川　浩氏

・　概要：福井図書館によると、「福井市資料篇 5」にある「続再夢紀事」１８日の記事に、「昨日赤松小三郎罷出所存之書付差出、鹿之助請取今朝差出候事」とあり、福井藩士の毛受鹿之助（めんじゅ・しかのすけ）　が建白書を受け取って春嶽に渡したことが分かる。

○　「赤松小三郎研究会設立１０周年記念事業等（討議資料）」

・　進行：滝澤進会長

・　概要：５つの記念事業とネットワーク協議会設立について概要の説明があり、討論が行われた。

第４１回赤松小三郎研究会

日時：２０２３年２月１１日

○　「建白七策」と幕末期における憲法（議会）構想（試論）

・　報告者：滝澤　進氏

・　概要：「建白七策」について、「建白七策」以前における他の諸構想と比較し、「建白七策」がその先進性・ 具体性・体系性において、また、憲法構想と呼び得るその広がりにおいて、群を抜くものであるとし、わが国の近代化をリードした「グランドデザイン」としての意義について再評価が必要であるとした。

○　「第９回赤松小三郎講演会の報告」

・　報告者：荻原　貴氏

・　概要：第８回赤松小三郎講演会の概要が報告された。

○　「赤松小三郎研究会設立１０周年について（自由討議)」

・　進行役：滝澤進氏

・　概要：　赤松小三郎研究会は、本年で設立１０周年を迎えるので、設立１０周年を記念して、これまでの研究会の活動で十分実施できなかった事業で、研究会の設立目的に相応しいものを選び、実施を検討する旨の説明があった。

○　「役員の変更」（事後報告）

・　運営委員の辞任　　白井亜希氏

・　監事の交替　　毛利元晶氏から小山満氏へ

第９回赤松小三郎講演会

日時：２０２２年１２月１０日（土）午後２時～４時４０分

演題：「赤松小三郎の立ち位置－公論と暴力の比較史を背景に－＝」

講師：三谷博氏（東京大学名誉教授）

ポイント：

・　赤松小三郎は、慶応3年5月に、幕府・越前・薩摩に政体改革を建言し、同年9月に、薩摩の桐野利秋らにより暗殺された。彼は暴力を使わない平和的な政権の移行・政体そのものの変革、特に議会をどう運営したらよいか、などを唱えたが、皮肉にも暴力（テロリズ ム）によってこの世から排除されてしまった。

・　グローバルな視点からみると、あらゆる革命で「公論」（公の場で政治の議論をすること）と「暴力」は同時に出現し（赤松は個人としてそれを体現したと言える）、「暴力」 を排除して終わる。

・　幕末明治の政治動乱の始まりを安政 5 年（1858）とすると、①　日本は 20 年という 短期間で政治動乱を終えることができた。 ② 全体として死者が少ない。約 3.2 万人。（フランス革命は約 155 万人） ③ 土地によっては、暴力の応酬がみられた。（水戸、対馬） ④ 政治的決定を平和裏に行った。

・　明治維新の大きな変革の特徴を一言で言えば、武士がいなくなったこと。約 500 家弱の 皇族・華族を除くと国民は全員平等の権利を持つ社会にすっかり変えてしまった。世界の革命の中で最もラディカルな革命だったと言っても良いが、そのラディカルとは決して犠牲者を多く出したことではなかった、ということが重要。

・　赤松小三郎は、犠牲者の少ない大改革と自由な政治体制の発端に位置するうちの一人 である。

・　「赤松小三郎 政体建言」（「鹿児島県史料 玉里島津家史料五」）

～　身分の世襲を廃止、有司（官僚）も身分を問わず人選。旗本を加えているのは他ではあまり見ない。

～　二院制の議政局＝議会を提言。両局で再議決の場合は議政局より国中に布告。この天皇・大臣に拒否権がないことは、議会主権（⇔ 君主主権）を意味する。これは赤松の特長。

・「土佐後藤象二郎より差出し候約定書（慶応三年六月）（いわゆる「薩土盟約」）

～　「王政復古」「諸侯会議」「人民共和」「二院制の議事堂（議会）」「公平」「人心一和」 など、構想の骨格は赤松の建言と酷似していた。

・　「政体」（慶応四年閏四月二十一日）

～　明治新政府が出した法令で、日本最初の憲法。戦後多くの学者はここには人権規定がないという理由で憲法とは言えないというのが常識となっている。政

体には赤松・後藤らが必要な事を考え出し、具現化しようとしたものが詰まっている。

- なぜ赤松は暗殺されたのか 。
  - 赤松がもし生きていたら赤松は明治時代に随分大きな働きをしたであろうと考えると、暗殺されたことが残念でならない。
  - 従来の説～赤松はイギリス式の兵学を主に薩摩藩へ、そして会津や他の藩にも教授していた。そして薩摩の軍事機密がほかに漏れることを恐れた薩摩藩が桐野利秋に命じて赤松を暗殺した。
  - 代替説＝桐野利秋単独犯行説～私は、桐野らは独自で行動したと考える。後に発見される彼の日記には誰かから暗殺を命令されたという記述はない。桐野らが薩摩藩から命令を受けて赤松を暗殺したというのはうがった解釈である。暗殺事件（テロリズム） というのは個人の勝手な思い込みで起きる。（例：生麦事件、大津事件、李鴻章襲撃 事件）
  - 当時の薩摩藩の動き～薩摩は長州と組んで武力動員を決めた。しかしあくまで武力で 圧力をかけて幕府に政権返上させるというシナリオだった。武力討幕ではなかったし、できれば平和的に決着したいと思っていた。よって、王政復古後の政体がテーマだった薩土盟約とは矛盾しない。
- 日本は明治維新の戦乱をわずか 20 年で終わらせ、西南の乱後は反動なしに、 自由な政治体制を築いた。その間に身分制をなくすなど様々な改革を行ない、立憲制の 出発点まで構築したことは凄いことだと思う。

会場から

講師の町田明広氏

会場の様子

赤松小三郎研究会設立10周年記念

赤松小三郎講演会のご案内

2023年
11月26日
(日)

赤松小三郎　上田市立博物館蔵

講演テーマ 「幕末政治と赤松小三郎」

講　師　　町田明広氏(神田外語大学教授)

幕末、信州上田藩士赤松小三郎は、京都で開いた洋学塾などで多くの英才を育てるとともに、わが国の近代化に向けてのグランドデザインを描き、その実現に力を尽くしました。

残念ながら、赤松は、1867 年(慶応3年)37歳で志半ばにして暗殺されましたが、その先進的な政治思想と優れた洋学の教えは日本の近代化に大きく貢献しました。

当研究会では、今回、神田外語大学教授で、日本近現代史(明治維新史)がご専門の町田明広氏を講師にお迎えし、『幕末政治と赤松小三郎』をテーマにお話をお伺いします。

日　時；2023年11月26日(日) 講演14:00～16:30(受付開始13:30)
会　場；日比谷図書文化館　地下1階コンベンションホール(裏面案内図ご参照)
参加費　；1,000円(当日会場受付にて申し受けます)
定　員　；200名(先着順　お早めにお申し込みください)

講師 町田明広氏(神田外語大学教授)

略歴

昭和37年(1962)生まれ、長野市出身。
日本近現代史(明治維新史)研究者、神田外語大学外国語学部教授・日本研究所所長。
著書に『幕末文久期の国家政略と薩摩藩』(2010)、『島津久光＝幕末政治の焦点』(2009)、『グローバル幕末史』(2015)、『薩長同盟論(2018)、『新説 坂本龍馬』(2019)、『攘夷の幕末史』(2022)、編著『幕末維新史への招待』(2023)など多数。

講師からひとこと

高校時代まで、長野市に在住していた関係から、非常に近い上田市にも何度か足を運んでおり、かなり以前から赤松小三郎には関心を抱いていました。

現在、薩摩藩を中心に慶応期の研究を進めていますが、赤松の建白書が薩摩藩側史料からも確認できます。

ところで、幕末維新史に関心があっても、赤松の存在を知らない方々が少なからず存在しています。これは、幕末の最終段階を迎える直前に、赤松が非業の死を遂げているからに他なりません。それに伴い、赤松は余りに過小評価されているのではないでしょうか。この事実は、非常に残念なことです。

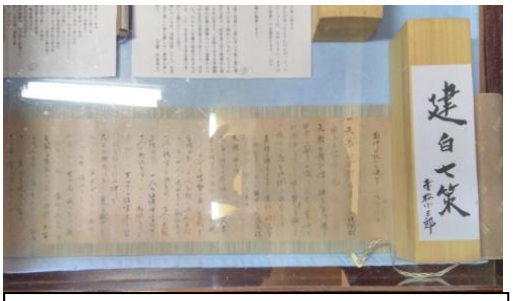
今回は、赤松が上田藩士であったことに最大限留意しつつ、その事績の意義や暗殺の背景を確認し、幕末政治史の中で赤松をどのように評価して位置付けるべきなのか、私なりに「赤松小三郎」の実相にアプローチを試みたいと思います。

お申込は

赤松小三郎研究会事務局(Eメールで事前のお申し込みをお願いいたします)
Eメール：kannazuki-6318@kxb.biglobe.ne.jp
(お名前、ご住所、本講演会をお知りになったきっかけなどご記入ください)
Eメールをご利用できない場合：電話：070-2685－2384(事務局　小山)
(提供いただく個人情報は講演会の案内などの目的で適正に取扱うとともに、目的外利用はいたしません)

主催　上田高等学校関東同窓会赤松小三郎研究会

赤松小三郎【天保2年（1831年）～慶応3年（1867年）】



建白書複製（赤松小三郎記念館）
原資料は鹿児島県歴史史料センター黎明館蔵

幕末の信州上田藩士。江戸に出て内田弥太郎、下曽根金三郎に師事し、数学、天文、測量、暦学、蘭学、砲術を学ぶ。その後勝海舟に入門し、その供侍として長崎海軍伝習所で航海術などを学ぶ。さらに横浜で英国士官アプリンから英語、英国兵法などを習う。

幕末の京都で開いた私塾や薩摩藩邸、会津藩邸で洋式兵学を教えた。諸藩より学ぶ門下生の数、８００余名。その中には東郷平八郎元帥、上村彦之丞大将など日清、日露戦争で活躍した諸将が含まれる。薩摩藩島津久光侯の委嘱により「重訂　英国歩兵練法」を翻訳した。

慶応３年５月、前政事総裁職（前福井藩主）の松平春嶽侯、島津久光侯及び幕府に建言した「建白七策」は、今後の政体構想と国家のグランドデザインを描いたもので、政治史のなかで輝いている。

天幕一和、諸藩一和のもと上下二局の議政局により内憂外患のこの時期を乗り切る方策を模索し、西郷隆盛や徳川慶喜への働きかけを行うなど、最後まで東奔西走したが、明治維新直前の慶応３年９月、京都において弟子の薩摩藩士桐野利秋らにより暗殺された。享年３７。

上田市（上田城跡公園内）に赤松小三郎記念館がある。

■会場のご案内

〒100-0012
東京都千代田区日比谷公園 1-4
日比谷図書文化館（地下１階）
日比谷コンベンションホール
（大ホール）（旧　日比谷図書館）

都営地下鉄●三田線「内幸町駅」A７出口／徒歩3分
東京メトロ
●丸の内線●日比谷線「霞ケ関駅」B２出口／徒歩3分
●千代田線「霞ケ関駅」C４出口／徒歩3分
ＪＲ「新橋駅」日比谷口（ＳＬ広場）徒歩10分
※当施設に駐車場・駐輪場はございません。公共交通機関をご利用下さい。